



公立大学法人 福井県立大学

Fukui Prefectural University

ファカルティ・ディベロップメント 報 告 書 2019

2020 年 3 月

F D 部会

目 次

はじめに	i
1. 活動概要	1
1. 1 委員の構成	1
1. 2 事業の実施状況	1
1. 2. 1 授業評価	1
1. 2. 2 授業公開	12
1. 2. 3 F D 研修	12
1. 2. 4 実施要項	13
2. 各部局のF D活動	
2. 1 経済学部	14
2. 1. 1 授業評価アンケート	14
2. 1. 2 授業公開	14
2. 1. 3 F D 教員懇談会（学科会議及び合同学科会議として）	15
2. 1. 4 授業改善についての課題と展望	15
[資料①] 経済学科	17
[資料②] 経営学科	20
2. 2 生物資源学部	
2. 2. 1 授業評価	23
2. 2. 2 授業公開の方針と実績	23
2. 2. 3 授業改善の取り組み	24
2. 2. 4 授業改善活動についての課題と展望	25
2. 3 海洋生物資源学部	
2. 3. 1 授業評価	26
2. 3. 2 授業公開の方針と実績	26
2. 3. 3 F D 研修への参加	27
2. 3. 4 授業改善についての課題と展望	29
2. 3. 5 その他	29
2. 4 看護福祉学部	30
2. 4. 1 授業評価	30
2. 4. 2 授業公開	31
2. 4. 3 授業改善への取り組み	31
2. 4. 4 F D 研修	31
2. 4. 5 授業改善についての課題と展望について	39
2. 5 学術教養センター	
2. 5. 1 授業評価アンケートの結果	41
2. 5. 2 授業公開の方針と実績	41
2. 5. 3 部局内F D 研修	42
2. 5. 4 授業改善についての課題と展望	44

はじめに

福井県立大学における FD 活動は、2003 年に始まり、2019 年度で 17 年に及びます。2002 年前後、たまたま立ち上げに関わる一人となり、当時の先進事例であった和歌山大学や山形大学に、他の教員や当時の教務課（現教育推進課）職員の方々とともに資料収集や聞き取り調査、研修に参加したことを思い出します。FD とは何かについてまだ手探りの中で、事前にはみんなおおいに身構えていましたが、準備を進める中で、その精神は、教員と学生との間に授業に関する対話の回路を開いておき、教員の一方的独善的な授業にならないよう教員間で相互交流を図るなどして組織的に授業改善に努める、ということに納得がいくようになってきました。

実際、昨年度の FD 部会長も引用されている中央教育審議会答申には、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる」とあります。これに、その後の演習・実習の重視、フィールドワークやアクティブ・ラーニングといった教育手法の拡大と重ね合わせると、通常の授業も含めて双方向性を確保した授業を、という理解も可能ではないかと思われます。

そのさい、何よりも重要なのは、教員サイドのイニシアティブをいかに確保するかです。FD 先行国アメリカでの実践から、授業評価を教員評価と結びつけてしまったがために教員が学生におもねる状況が生じたり、極端な場合には授業評価と成績の取引を持ちかける学生まで出てきたりするという報告もあります。このことは、健全にも本学では立ち上げ当初から意識されており、あくまで教育改善の組織的活動として FD を積極的に進めるという合意が成立しています。このことは、ここで改めて確認しておきたいと思います。もちろん、それだけに教員サイドの授業に対する責任が重くなることは言うまでもありません。

2019 年度も、授業評価の方法が一部改良されるなどデリケートな改善も加えながら、さまざまな取り組みが引き続き行われたことは、本報告書が示すとおりです。他部局の取り組みも参考にしながら、本報告書が授業改善に資することを期待します。

なお、FD 活動と合わせて、2019 年度には教学 IR の実施に向けた準備が始まりつつあります。まだその具体像は明確にはなっていませんが、願わくはそれが FD 活動と有機的に関連し、大きくは教育全般のさらなる改善に資することになるよう進めていきたいと考えています。

最後に、本部会を支えてくださったメンバーの皆さん、FD 研修の実施等ご助力いただくとともに教学 IR の準備に当たってもご尽力いただいている学術教養センターの山川教授と徳野教授、さらには授業評価アンケートの遂行や本報告書の整理・編集、会議の準備と後始末など、他の業務も抱えながら尽力いただいた教育推進課の福岡主任に深く感謝いたします。

2020 年 3 月

2019 年度 FD 部会 部会長 新宮 晋

1. 活動概要

1.1 委員の構成

2019年度のFD部会メンバーは、以下の6名の教員である。

2019年度FD部会委員名簿

氏 名	所 属	職	役 割
新 宮 晋	経済学部	教 授	委 員 長
アンドレイ・ペロフ	経済学部	教 授	委 員
伊 藤 崇 志	生物資源学部	准 教 授	委 員
佐 藤 晋 也	海洋生物資源学部	准 教 授	委 員
大 川 洋 子	看護福祉学部	教 授	委 員
加 藤 ま ど か	学術教養センター	准 教 授	委 員

1.2 事業の実施状況

1.2.1 授業評価

実施要項、実施概要、質問および回答用紙、全体集計結果、経年特性（前期、後期）を次頁より順に掲載する。

令和元年度 学生による授業評価の実施結果

（前期）実施期間 令和元年7月9日（火）～7月26日（金）

調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	3,155 枚	5,273 枚
生物資源学部	642 枚	898 枚
海洋生物資源学部	932 枚	1,195 枚
看護福祉学部	1,670 枚	2,507 枚
学術教養センター	4,335 枚	6,604 枚
キャリアセンター	0 枚	0 枚
計	10,734 枚	16,477 枚

参加教員

＜学部＞	実施人数	実施率	対象数
経済学部	28 人	96.55 %	／ 29
生物資源学部	14 人	93.33 %	／ 15
海洋生物資源学部	16 人	100.00 %	／ 16
看護福祉学部	25 人	83.33 %	／ 30
学術教養センター	24 人	96.00 %	／ 25
キャリアセンター他	3 人	75.00 %	／ 4
非常勤講師	50 人	81.97 %	／ 61
計	160 人	88.89 %	／ 180

参加科目

＜学部＞	実施科目	実施率	対象数
経済学部	51 科目	80.95 %	／ 63
生物資源学部	18 科目	78.26 %	／ 23
海洋生物資源学部	20 科目	86.96 %	／ 23
看護福祉学部	46 科目	63.89 %	／ 72
学術教養センター	147 科目	80.77 %	／ 182
キャリア教育科目	0 科目	0.00 %	／ 0
計	282 科目	77.69 %	／ 363

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	27 枚	77 枚
生物資源学研究科	51 枚	156 枚
看護福祉学研究科	0 枚	25 枚

計 78 枚 258 枚

＜大学院＞	実施人数	実施率	対象数
経済・経営学研究科	1 人	9.09 %	／ 11
生物資源学研究科	3 人	60.00 %	／ 5
看護福祉学研究科	0 人	0.00 %	／ 7
海洋生物資源学専攻	2 人	28.57 %	／ 7
キャリアセンター他	1 人	50.00 %	／ 2
非常勤講師	1 人	10.00 %	／ 10
計	8 人	19.05 %	／ 42

＜大学院＞	実施科目	実施率	対象数
経済・経営学研究科	3 科目	18.75 %	／ 16
生物資源学研究科	5 科目	23.81 %	／ 21
看護福祉学研究科	0 科目	0.00 %	／ 12
計	8 科目	16.33 %	／ 49

（後期）実施期間 令和2年1月17日（金）～1月31日（金）

調査票配布・回収状況

＜学部＞	回収数	配布数
経済学部	2,493 枚	4,910 枚
生物資源学部	495 枚	789 枚
海洋生物資源学部	512 枚	1,012 枚
看護福祉学部	1,477 枚	2,413 枚
学術教養センター	3,618 枚	5,355 枚
キャリアセンター	0 枚	0 枚
計	8,595 枚	14,479 枚

参加教員

＜学部＞	実施人数	実施率	対象数
経済学部	30 人	96.77 %	／ 31
生物資源学部	14 人	87.50 %	／ 16
海洋生物資源学部	13 人	86.67 %	／ 15
看護福祉学部	20 人	71.43 %	／ 28
学術教養センター	24 人	96.00 %	／ 25
キャリアセンター他	4 人	80.00 %	／ 5
非常勤講師	40 人	76.92 %	／ 52
計	145 人	84.30 %	／ 172

参加科目

＜学部＞	実施科目	実施率	対象数
経済学部	85 科目	85.86 %	／ 99
生物資源学部	17 科目	70.83 %	／ 24
海洋生物資源学部	16 科目	59.26 %	／ 27
看護福祉学部	36 科目	60.00 %	／ 60
学術教養センター	120 科目	86.96 %	／ 138
キャリア教育科目	0 科目	0.00 %	／ 0
計	274 科目	78.74 %	／ 348

＜大学院＞	回収数	配布数
経済・経営学研究科	7 枚	21 枚
生物資源学研究科	29 枚	70 枚
看護福祉学研究科	0 枚	0 枚

計 36 枚 91 枚

＜大学院＞	実施人数	実施率	対象数
経済・経営学研究科	0 人	0.00 %	／ 0
生物資源学研究科	4 人	80.00 %	／ 5
看護福祉学研究科	0 人	0.00 %	／ 0
海洋生物資源学専攻	0 人	0.00 %	／ 0
キャリアセンター他	1 人	100.00 %	／ 1
非常勤講師	0 人	0.00 %	／ 4
計	5 人	50.00 %	／ 10

＜大学院＞	実施科目	実施率	対象数
経済・経営学研究科	1 科目	33.33 %	／ 3
生物資源学研究科	4 科目	57.14 %	／ 7
看護福祉学研究科	0 科目	0.00 %	／ 0
計	5 科目	50.00 %	／ 10



福井県立大学 授業に関する調査

質問および回答用紙

この調査は、県立大学が皆さんに提供している教育を、より良いものにしていくために
行うものです。あなたが現在受けているこの授業についての調査にご協力ください。

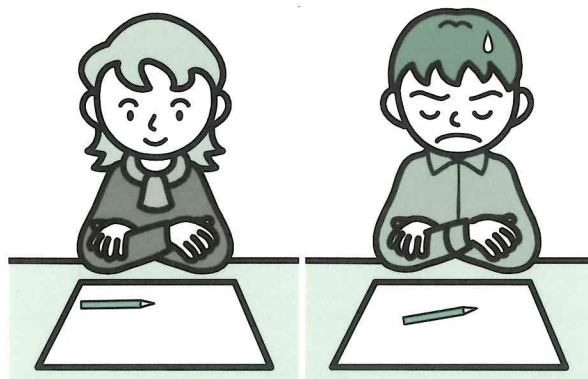
回答は裏面の回答欄に記入してください。

あなたに当てはまるもの、あなたの意見や感想にもっとも近いものの番号をマーク、記述
してください。

記入上の注意

- 1：選択回答の場合はマークシート記入を、記述回答の場合は対応する空欄に記述
してください。
- 2：記入は濃い(B程度)鉛筆またはシャープペンシルで強く書いてください。
- 3：訂正する場合は、プラスチック消しゴムで完全に消してください。
- 4：用紙は、コンピュータ処理しますので、折り曲げたり汚したりしないでください。

マーク例) 良い例 (2) ... ▶ ● 悪い例 (2) ... ▶ ~~(2)~~ ~~(3)~~ ~~(4)~~ ~~(2)~~



本アンケートによる(全学、学部別等)授業評価結果は、本学
ホームページ上で開示予定です。

過去の集計結果は <http://www.fpu.ac.jp/group/fd/> を
御覧ください。

学籍番号の上から1ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 2018年入学生・・・①

学籍番号の上から2ケタ目の数字をマークしてください。

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨

例) 2018年入学生・・・⑧

学部生 所属の番号をマークしてください。

1: 経済学部経済学科 2: 経済学部経営学科 3: 生物資源学部生物資源学科 4: 海洋生物資源学部海洋生物資源学科
5: 看護福祉学部看護学科 6: 看護福祉学部社会福祉学科 7: 科目等履修生・聴講生

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦

大学院生 所属の番号をマークしてください。

8: 経済・経営学研究科 地域・国際経済専攻 9: 経済・経営学研究科 経営学専攻 10: 生物資源学研究科 生物資源学専攻
11: 生物資源学研究科 海洋生物資源学専攻 12: 看護福祉学研究科 看護学専攻 13: 看護福祉学研究科 社会福祉学専攻 14: 科目等履修生・聴講生

⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭

質問および回答欄

Q1 この授業(課題、レポート、予習復習を含む)に意欲的に取り組みましたか?

1. 意欲的に取り組まなかった 2. あまり意欲的に取り組まなかった 3. ある程度意欲的に取り組んだ 4. 意欲的に取り組んだ

① ② ③ ④

Q2 先生の講義の方法(話し方、板書、プロジェクターの使用、学習支援システム等の活用)はどうでしたか?

1. 不適切 2. やや不適切 3. まずまず適切 4. 適切

① ② ③ ④

Q3 授業中の内容はどの程度理解できましたか?

1. 理解できなかった 2. あまり理解できなかった 3. ある程度理解できた 4. 理解できた

① ② ③ ④

Q4 この授業の分野への関心は高まりましたか?

1. 高まらなかった 2. あまり高まらなかった 3. 少し高まった 4. 高まった

① ② ③ ④

Q5 この授業を総合的に評価してください。

1. 良くない 2. あまり良くない 3. まずまず良い 4. 良い

① ② ③ ④

Q6 授業を受けた上での感想(先生の授業への熱意、方法、教材、授業内容はシラバスに即していたか、など)を良かった点あるいは不備な点について自由に書いてください。この欄の記述に対する担当教員のコメントを、後日ウェブ上に掲載します。

Q6 の自由記述欄

Q7 教員設定の質問(別紙参照)

① ② ③ ④

Q8 教員設定の質問(別紙参照)

Q8 の自由記述欄

全体集計結果の見方

次頁より授業評価の集計結果を学部（前期・後期）、大学院（前期・後期）の順に掲載する。以下に、集計結果の見方を記す。

集計数	回答された全てのアンケートから学部・学科・入学年度が不明のデータを除いたもの
Q1 から Q5	アンケートの Q1 から Q5 に対応
数値上段	平均値（質問は、4 件法）
数値下段	母標準偏差。数値が大きい場合、平均値周りに正規分布状にばらつきが大きい時もあるが、良い評価と悪い評価が 2 分されている場合もあるので要注意。
集計方法	設問は、回答選択肢「1, 2, 3, 4」をそれぞれ「1 点, 2 点, 3 点, 4 点」と得点化、設問に対して無回答の場合は得点化せず、かつ有効回答数としては計上していない。この得点化規則に則り、設問別、集計グループ別に合計得点を求めて、有効回答数で割った平均値を上段に、母標準偏差を下段に示す。無回答の場合の人数は母集団に含めず。「―」の欄は有効回答が無かったことを示す。

〔集計グループ〕

全体	全ての集計対象者
学部学科別	当該学部または学科の学生の評価結果を集計
入学年次別	学部学科の枠を越え、学生の入学年次（西暦年の下 2 桁）別に集計
部局別	当該学部に所属する教員が提供する科目に対する評価結果を集計
規模別	授業が行われた教室の大小別に集計

令和元年度 前期 学生による授業評価全体集計結果 (学部生)

集計グループ (集計数)		Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体 (10389)		3.34 0.68	3.42 0.67	3.26 0.70	3.29 0.75	3.44 0.65
学部学科別 (10389)						
経済学部 (5228)		3.32 0.68	3.41 0.68	3.25 0.70	3.27 0.74	3.42 0.65
	経済学科 (2643)	3.32 0.66	3.39 0.67	3.24 0.69	3.24 0.74	3.40 0.65
	経営学科 (2585)	3.32 0.70	3.43 0.68	3.27 0.71	3.30 0.75	3.45 0.65
生物資源学部 (1224)		3.26 0.69	3.37 0.68	3.15 0.71	3.21 0.76	3.37 0.67
	生物資源学科 (1224)	3.26 0.69	3.37 0.68	3.15 0.71	3.21 0.76	3.37 0.67
海洋生物資源学部 (1435)		3.27 0.73	3.33 0.72	3.21 0.73	3.19 0.80	3.37 0.71
	海洋生物資源学科 (1435)	3.27 0.73	3.33 0.72	3.21 0.73	3.19 0.80	3.37 0.71
看護福祉学部 (2475)		3.48 0.63	3.51 0.61	3.34 0.67	3.41 0.70	3.52 0.60
	看護学科 (1658)	3.57 0.58	3.54 0.60	3.39 0.65	3.49 0.66	3.57 0.59
	社会福祉学科 (817)	3.29 0.68	3.43 0.63	3.23 0.69	3.25 0.76	3.43 0.62
科目等履修生・聴講生 (27)		3.48 0.50	3.56 0.57	3.41 0.62	3.78 0.42	3.67 0.54
入学年次別 (10389)						
1 1 生 (23)		2.91 0.72	3.26 0.74	3.26 0.67	3.35 0.70	3.26 0.74
1 2 生 (24)		3.46 0.64	3.54 0.58	3.46 0.58	3.42 0.70	3.50 0.58
1 3 生 (42)		3.40 0.58	3.57 0.54	3.43 0.49	3.48 0.55	3.43 0.54
1 4 生 (48)		3.13 0.60	3.25 0.66	3.15 0.61	3.00 0.79	3.33 0.59
1 5 生 (388)		3.32 0.67	3.43 0.68	3.25 0.67	3.32 0.74	3.46 0.64
1 6 生 (2447)		3.31 0.66	3.37 0.66	3.21 0.66	3.25 0.73	3.38 0.64
1 7 生 (3022)		3.30 0.69	3.39 0.68	3.21 0.71	3.27 0.74	3.42 0.66
1 8 生 (4395)		3.40 0.68	3.46 0.67	3.31 0.72	3.32 0.76	3.48 0.65
部局別 (10389)						
経済学部 (3040)		3.29 0.68	3.34 0.70	3.18 0.72	3.22 0.76	3.35 0.67
生物資源学部 (616)		3.16 0.65	3.29 0.62	3.06 0.64	3.13 0.70	3.29 0.59
海洋生物資源学部 (899)		3.23 0.72	3.32 0.74	3.18 0.71	3.17 0.78	3.36 0.71
看護福祉学部 (1612)		3.45 0.63	3.47 0.62	3.30 0.64	3.41 0.69	3.48 0.61
学術教養センター (4222)		3.39 0.68	3.49 0.65	3.33 0.70	3.33 0.75	3.51 0.63
規模別 (10389)						
1 0 0 人以上 (5622)		3.32 0.68	3.36 0.69	3.20 0.72	3.25 0.76	3.38 0.67
1 0 0 人未満 (4767)		3.38 0.68	3.48 0.64	3.33 0.67	3.33 0.73	3.50 0.62

令和元年度 前期 学生による授業評価全体集計結果 (大学院生)

集計グループ	(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体	(76)	3.34 0.70	3.62 0.61	3.21 0.57	3.34 0.64	3.45 0.75
研究科専攻別	(76)					
経済・経営学研究科	(20)	3.70 0.56	3.90 0.44	3.60 0.49	3.60 0.58	3.80 0.51
地域・国際経済政策専攻	(3)	3.00 0.82	3.33 0.94	3.00 0.00	3.00 0.82	3.33 0.94
経営学専攻	(17)	3.82 0.38	4.00 0.00	3.71 0.46	3.71 0.46	3.88 0.32
生物資源学研究科	(51)	3.22 0.72	3.47 0.64	3.06 0.54	3.22 0.64	3.27 0.79
生物資源学専攻	(39)	3.28 0.68	3.51 0.59	3.05 0.55	3.26 0.59	3.46 0.59
海洋生物資源学専攻	(12)	3.00 0.82	3.33 0.75	3.08 0.49	3.08 0.76	2.67 1.03
看護福祉学研究科	(4)	3.25 0.43	4.00 0.00	3.25 0.43	3.75 0.43	3.75 0.43
看護学専攻	(3)	3.33 0.47	4.00 0.00	3.00 0.00	3.67 0.47	3.67 0.47
社会福祉学専攻	(1)	3.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00	4.00 0.00
科目等履修生・聴講生	(1)	3.00 0.00	4.00 0.00	3.00 0.00	3.00 0.00	4.00 0.00
入学年次別	(76)					
1 2 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 3 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 4 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 5 生	(1)	3.00 0.00	2.00 0.00	3.00 0.00	2.00 0.00	2.00 0.00
1 6 生	(0)	— —	— —	— —	— —	— —
1 7 生	(2)	3.50 0.50	3.50 0.50	3.00 0.00	3.50 0.50	3.50 0.50
1 8 生	(14)	3.57 0.49	3.93 0.26	3.43 0.49	3.57 0.49	3.71 0.45
1 9 生	(59)	3.29 0.74	3.58 0.62	3.17 0.59	3.31 0.64	3.41 0.78
部局別	(76)					
経済・経営学研究科	(25)	3.60 0.57	3.92 0.39	3.52 0.50	3.60 0.57	3.80 0.49
生物資源学研究科	(51)	3.22 0.72	3.47 0.64	3.06 0.54	3.22 0.64	3.27 0.79
看護福祉学研究科	(0)	— —	— —	— —	— —	— —

令和元年度 後期 学生による授業評価全体集計結果 (学部生)

集計グループ (集計数)		Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価
全体 (8324)		3.38 0.67	3.44 0.67	3.31 0.69	3.33 0.74	3.46 0.66
学部学科別 (8324)						
経済学部 (4253)		3.36 0.67	3.43 0.67	3.31 0.68	3.32 0.72	3.46 0.64
	経済学科 (2252)	3.35 0.66	3.40 0.67	3.28 0.68	3.30 0.72	3.44 0.65
	経営学科 (2001)	3.37 0.69	3.46 0.66	3.33 0.68	3.33 0.73	3.48 0.64
生物資源学部 (887)		3.29 0.72	3.39 0.71	3.17 0.78	3.22 0.81	3.41 0.72
	生物資源学科 (887)	3.29 0.72	3.39 0.71	3.17 0.78	3.22 0.81	3.41 0.72
海洋生物資源学部 (955)		3.23 0.71	3.33 0.74	3.19 0.73	3.15 0.81	3.34 0.73
	海洋生物資源学科 (955)	3.23 0.71	3.33 0.74	3.19 0.73	3.15 0.81	3.34 0.73
看護福祉学部 (2205)		3.52 0.60	3.55 0.62	3.43 0.64	3.47 0.67	3.55 0.60
	看護学科 (1681)	3.58 0.58	3.56 0.63	3.47 0.63	3.52 0.66	3.58 0.59
	社会福祉学科 (524)	3.34 0.64	3.49 0.60	3.32 0.65	3.33 0.70	3.48 0.60
科目等履修生・聴講生 (24)		2.92 0.91	3.21 1.00	2.79 0.91	3.21 0.96	3.33 0.99
入学年次別 (8324)						
1 2 生 (7)		3.57 0.49	3.57 0.49	3.57 0.49	3.57 0.49	3.57 0.49
1 3 生 (5)		3.40 0.49	3.80 0.40	3.40 0.49	3.60 0.49	3.80 0.40
1 4 生 (24)		3.25 0.78	3.38 0.75	3.25 0.52	3.54 0.71	3.63 0.48
1 5 生 (58)		3.29 0.67	3.34 0.68	3.22 0.64	3.22 0.77	3.38 0.64
1 6 生 (397)		3.47 0.57	3.51 0.62	3.45 0.61	3.51 0.60	3.57 0.57
1 7 生 (1374)		3.37 0.66	3.48 0.64	3.31 0.64	3.37 0.69	3.48 0.62
1 8 生 (2623)		3.34 0.66	3.40 0.67	3.25 0.69	3.28 0.73	3.42 0.66
1 9 生 (3836)		3.40 0.69	3.46 0.69	3.34 0.72	3.33 0.77	3.47 0.67
部局別 (8324)						
経済学部 (2394)		3.33 0.66	3.39 0.67	3.25 0.67	3.30 0.70	3.42 0.64
生物資源学部 (478)		3.23 0.71	3.29 0.72	3.05 0.79	3.14 0.82	3.29 0.75
海洋生物資源学部 (498)		3.11 0.74	3.24 0.79	3.09 0.76	3.04 0.83	3.26 0.77
看護福祉学部 (1442)		3.56 0.57	3.56 0.61	3.46 0.61	3.52 0.63	3.57 0.59
学術教養センター (3512)		3.39 0.69	3.48 0.66	3.36 0.70	3.33 0.76	3.50 0.65
キャリアセンター他 (0)		0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00	0.00 0.00
規模別 (8324)						
1 0 0 人以上 (4111)		3.33 0.68	3.39 0.68	3.25 0.70	3.29 0.75	3.41 0.66
1 0 0 人未満 (4213)		3.42 0.67	3.50 0.66	3.37 0.68	3.37 0.73	3.51 0.65

令和元年度 後期 学生による授業評価全体集計結果 (大学院生)

集計グループ		(集計数)	Q1意欲的受講	Q2授業方法	Q3内容理解	Q4関心	Q5総合評価	
全体			(35)	3.49	3.54	3.26	3.63	3.66
				0.73	0.73	0.69	0.54	0.53
研究科専攻別			(35)					
	経済・経営学研究科		(5)	3.40	3.40	3.20	3.60	3.60
				0.80	0.80	0.75	0.49	0.49
		地域・国際経済政策専攻	(2)	2.50	2.50	2.50	3.00	3.00
				0.50	0.50	0.50	0.00	0.00
		経営学専攻	(3)	4.00	4.00	3.67	4.00	4.00
				0.00	0.00	0.47	0.00	0.00
	生物資源学研究科		(29)	3.48	3.55	3.28	3.62	3.66
				0.72	0.72	0.69	0.55	0.54
		生物資源学専攻	(28)	3.46	3.54	3.25	3.61	3.64
				0.73	0.73	0.69	0.56	0.55
		海洋生物資源学専攻	(1)	4.00	4.00	4.00	4.00	4.00
				0.00	0.00	0.00	0.00	0.00
	看護福祉学研究科		(0)	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—
		看護学専攻	(0)	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—
		社会福祉学専攻	(0)	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	
科目等履修生・聴講生		(1)	4.00	4.00	3.00	4.00	4.00	
			0.00	0.00	0.00	0.00	0.00	
入学年次別			(35)					
	1 2 生		(0)	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—
	1 3 生		(0)	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—
	1 4 生		(0)	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—
	1 5 生		(0)	—	—	—	—	—
				—	—	—	—	—
	1 6 生		(0)	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	
1 7 生		(0)	—	—	—	—	—	
			—	—	—	—	—	
1 8 生		(2)	3.50	4.00	3.50	4.00	4.00	
			0.50	0.00	0.50	0.00	0.00	
1 9 生		(33)	3.48	3.52	3.24	3.61	3.64	
			0.74	0.74	0.70	0.55	0.54	
部局別			(35)					
	経済・経営学研究科		(6)	3.50	3.50	3.17	3.67	3.67
				0.76	0.76	0.69	0.47	0.47
	生物資源学研究科		(29)	3.48	3.55	3.28	3.62	3.66
				0.72	0.72	0.69	0.55	0.54
	看護福祉学研究科		(0)	—	—	—	—	—
			—	—	—	—	—	

重要項目の経年特性(前期)

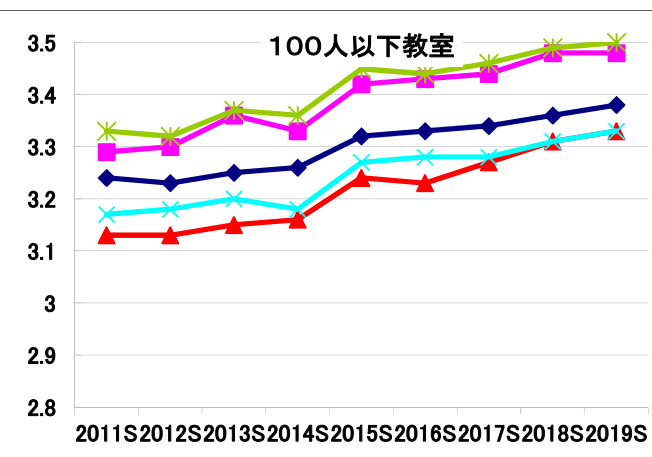
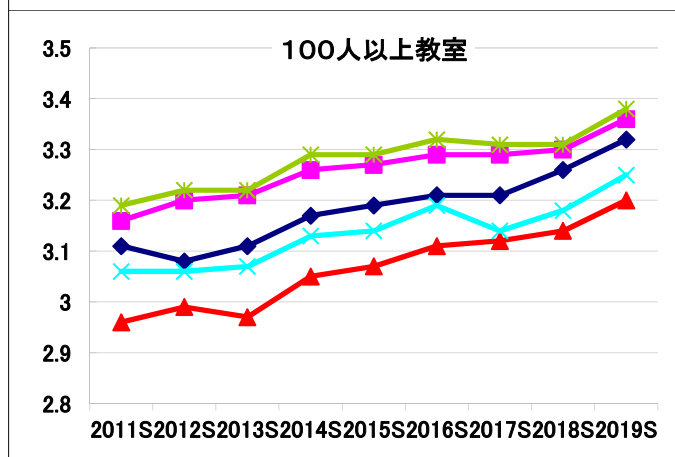
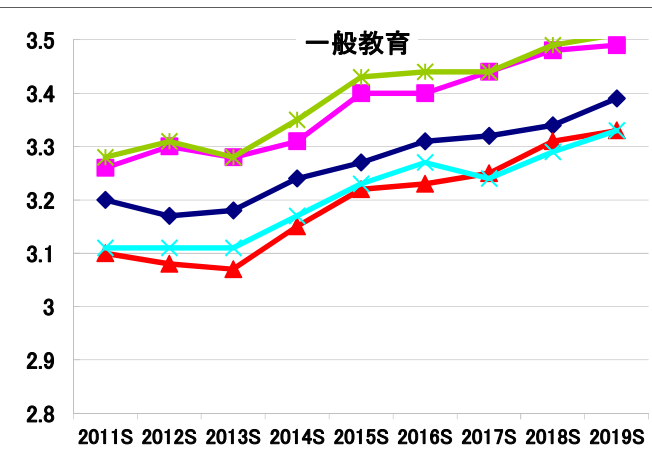
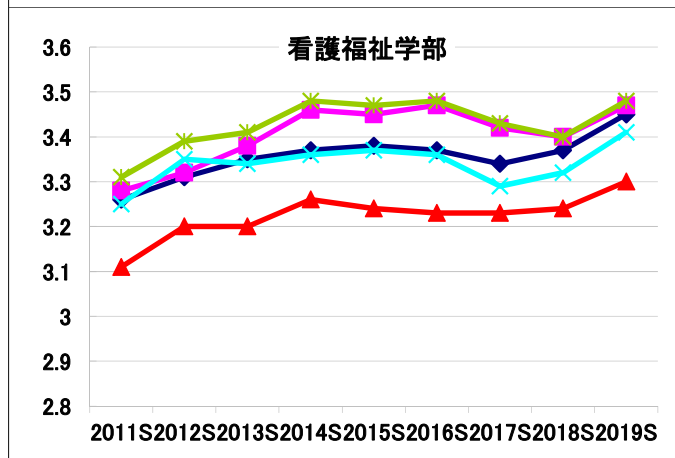
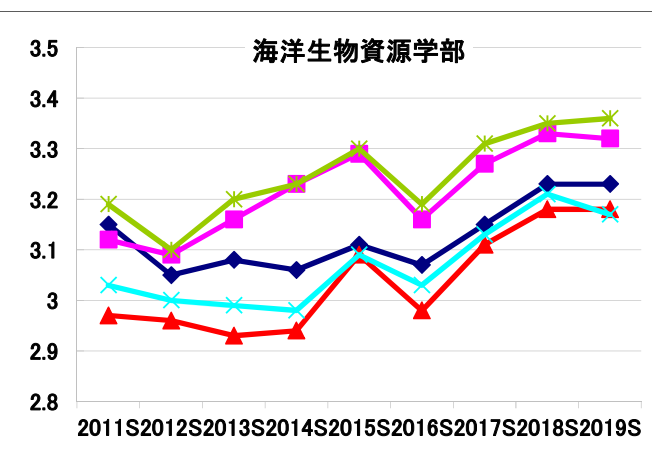
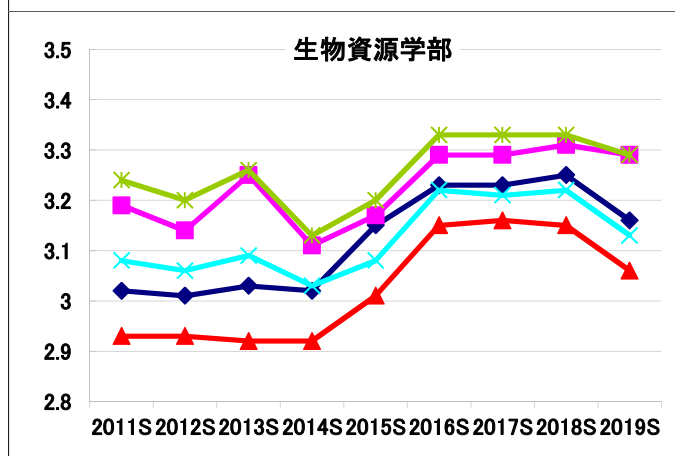
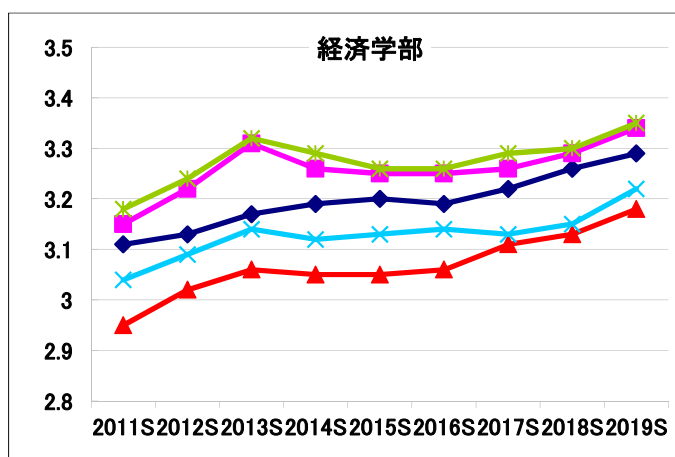
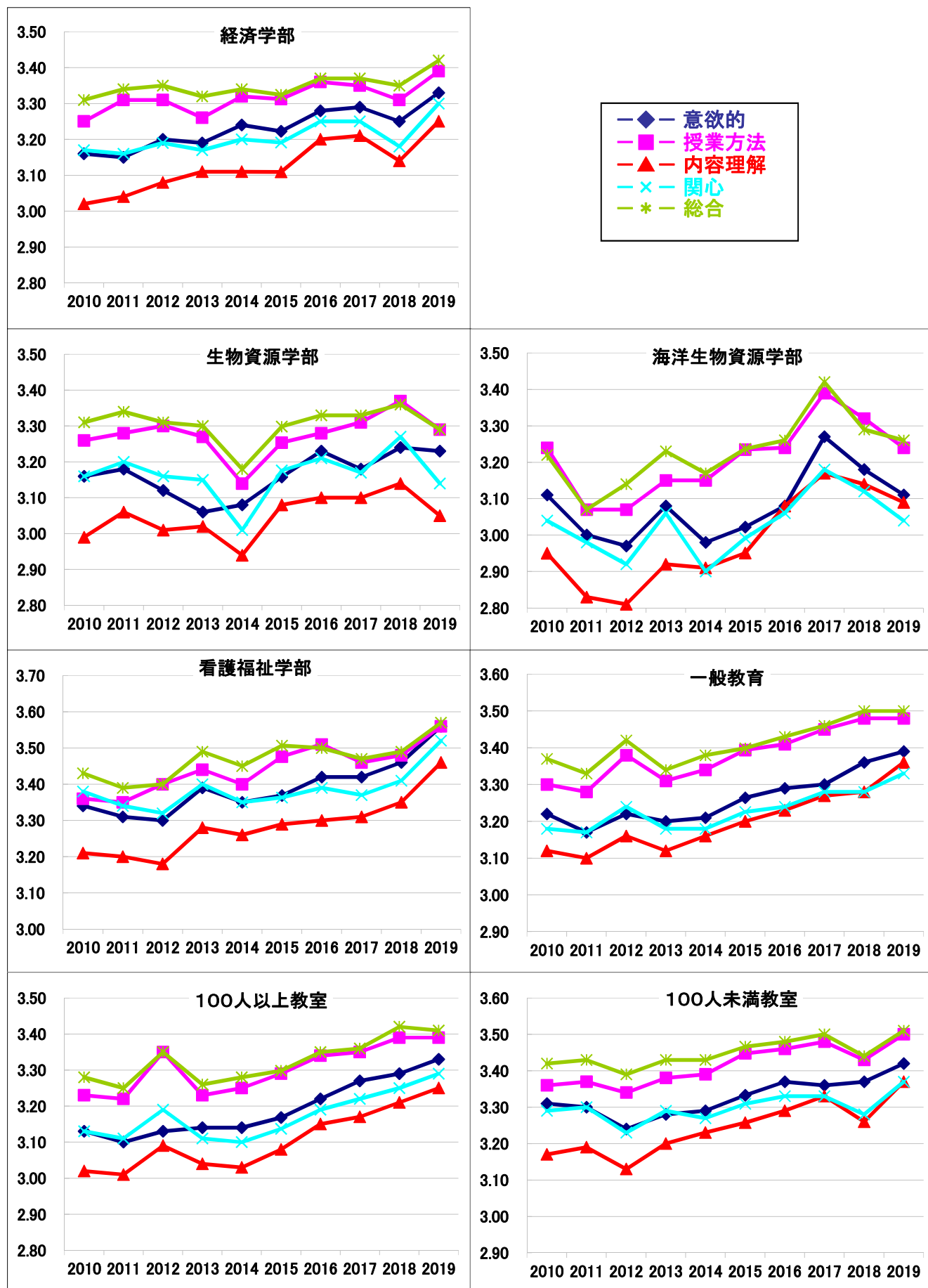


図2 重要項目の経年特性(後期)



1.2.2 授業公開

詳細は2章「各部局のFD活動」にて報告する。

1.2.3 FD研修

全体研修のみ示す。それぞれの詳細および各部局で行った研修は、2章「各部局のFD活動」にて報告する。

学内研修

第1回 全学ミーティング 2019年5月29日（水）

（テーマ）1 新任役員・新任教員紹介

2 教員表彰

3 部局を横断した研究成果について

「三世代近居の健康長寿学」

第2回 全学ミーティング 2019年7月31日（水）

（テーマ）1 経済学部

『「人口減少時代」における「公立」大学「経済系」学部の展望』

2 生物資源学部

『生物資源学部の現在地—新学科開設とこれからの取組み』

3 研究費の競争的資金について

第3回 全学ミーティング 2019年9月25日（水）

（テーマ）海洋生物資源学部「海洋生物資源学部の増養殖に関連する研究への取組み」

看護福祉学部「看護福祉学部の現状」

第4回 全学ミーティング 2019年12月25日（水）

（テーマ）パネルディスカッション「SDGsに福井県立大学はどう取り組むべきか？」

情報セキュリティについて

学外研修

第9回 Fレックス合宿研修会（詳細はP42を参照してください）

開催日：2019年9月9日（月）～10日（火）

開催校：福井県立大学

内容：1日目：「主体性の源とは何か」講師：由佐美加子氏

2日目：パネルディスカッション「教学IRの現状と今後」

1.2.4 実施要項

福井県立大学学生による授業評価実施要項

- 1 目 的
学生による授業評価を通じ、教員が授業の内容および方法の改善を図ることにより、教育力の向上に取り組む。
- 2 対象教員
専任教員および非常勤講師
- 3 対象学生
学部生、大学院生、科目等履修生・聴講生
- 4 対象授業
(1) から (3) を除く授業科目
ただし、(1) から (3) については、学部・学科および教員が希望する場合は実施することができる。
(1) オムニバス授業
(2) 実験、実習（指導）、論文（指導）、研究、卒業研究、演習教科
(3) 実施期間終了後の集中講義
- 5 期 間
前期科目： 前期 期末試験期間前の2週間
後期科目、通年科目： 後期 期末試験期間前の2週間
集中講義は、原則、講義の最終日に実施する。
- 6 方 法
アンケート用紙にて実施する。
ただし、事前の申請により、LMSにて実施することができる。
- 7 項 目
評価は、下記項目について実施する。
(1) から (5) については、4段階評価とし、(6) については、自由記述とする。
ただし、下記項目に加えて、教員が質問を設定することができる。

(1) 受講の意欲
(2) 授業方法
(3) 内容の理解
(4) 関心
(5) 総合評価
(6) 感想等
- 8 評価結果の取扱い
評価結果の集計終了後、授業科目ごとの評価結果とあわせて、アンケート用紙を教員に送付する。教員がアンケート用紙を事務局に返却後、評価結果およびLMS実施データともに部局長の閲覧に供する。部局長は必要に応じて授業改善のための話し合いの場を設ける。
評価結果は本要項の目的以外に使用してはならない。
- 9 評価結果の公開
(1) 評価結果の公開については、専任教員のみ、授業科目ごとの評価結果（授業科目名、教員名、質問毎の平均点）を学内LAN内のウェブページにて公開する。
ただし、7（6）感想等の記載内容については、公開しない。
評価結果の公開に当たっては、全体の集計結果についてもあわせて公開する。
(2) 授業評価に対する専任教員のコメントを、学内LAN内のウェブページにて公開する。

【 附 則 】

平成26年 4月 1日 施行
平成27年 5月26日 改正（期間）
平成29年 6月 7日 改正（評価結果の取扱い）

2.1 経済学部（アンドレイ・ベロフ・飛田 正之）

経済学部の本年度の公式のFD活動は、①「授業評価」（前期、後期）、②「授業公開」（2件、うち前期1件、後期1件）、③部局内懇談会の3つからなる。これ以外にも、教授会の前後に非公式の懇談会を行など、FD活動に関わる自主的な議論は日常業務として活発に行われた。以下はこのうち、公式のものについて報告するものである。非公式のものについては、課題と展望で言及する。

2.1.1 授業評価アンケート

＜2019年度前期授業評価アンケート＞（学部生）

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.32 (0.68)	3.41 (0.68)	3.25 (0.70)	3.27 (0.74)	3.42 (0.65)

＜2019年度後期授業評価アンケート＞（学部生）

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.36 (0.67)	3.43 (0.67)	3.31 (0.68)	3.32 (0.72)	3.46 (0.64)

＜2019年度前期授業評価アンケート＞（大学院生）

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.70 (0.56)	3.90 (0.44)	3.60 (0.49)	3.60 (0.58)	3.80 (0.51)

＜2019年度後期授業評価アンケート＞（大学院生）

問	1.意欲的受講	2.授業方法	3.内容理解	4.関心	5.総合評価
経済学部 平均	3.40 (0.80)	3.40 (0.80)	3.20 (0.75)	3.60 (0.49)	3.60 (0.49)

2.1.2 授業公開

(1) 方針

経済学部の授業公開ポリシーは、従前通り、具体的な授業参観を通して公開者・参観者の授業改善に資することを目的としている。

(2) 実施実績

〔前期〕：1件の授業公開

科目名：演習Ⅰ（合同ゼミ：清水ゼミ、杉山ゼミ）

内容：（3回連続、回帰分析セミナー）

日時と講義概要：

●3回シリーズの第1回目（回帰分析入門）

5月30日(木)3限(13:00～14:30)

●3回シリーズの第2回目(回帰分析ソフトの使い方)

6月06日(木)3限(13:00～14:30)

●3回シリーズの第3回目(仮説検定と予測の仕方)

6月13日(木)3限(13:00～14:30)

場所：図書館棟、第二情報演習室

〔後期〕1件の授業公開

科目名：ロシア経済特論

テーマ：ロシア財政制度

講義概要：ロシアの財政制度とその国際比較、歳入における輸出の原料依存本質、歳出の移行的本質

担当：アンドレイ・ペロフ

日時：2019年12月11日(水)3時限目

場所：経済学部棟、L206 演習室

2.1.3 FD教員懇談会（学科会議及び合同学科会議として）

日時：2019年7月17日(水)3時限目 @経済学部棟9F会議室及び教授会室（学科別）

日時：2020年3月4日(水)12:20～ 教授会後

今年度経済学部は、主に中期計画にも挙げた「緩やかな履修モデル」の作成に向けて、WGによる素案をもとに機会を捉えては意見聴取を行ってきた。このうち上記2件が主要な論点集約の機会となった懇談会である。

ここで改めて確認されたのは、経済学部が経済学科と経営学科の2学科体制でやってきたことの意義である。いずれも長い歴史の積み重ねの上にディシプリンとして確立した学問体系を持つものであり、だからこそその体系性を前提とした履修モデルを改めて学生に分かり易く提示することの重要性である。ただ、これまで学生に示される履修体系はカテゴリー提示にとどまり、学生にとって学問体系の意義やゴールイメージと結びつきにくいという難点があった。

これを改めることを「履修モデル」改革の本旨とし、議論を重ねてきた。別添資料①②として示すものは、その「パイロット版」である。これを学生に（主に来年度は基礎ゼミを通じ）提示することで趣旨が通じるかどうか確認し、学生からのフィードバックを通してさらにこのモデルを改良することになった。

来年度、引き続きこの件を教育改善の大きな柱の一つとし継続的に議論していくことになった。

〔資料①〕〔資料②〕挿入

2.1.4 授業改善についての課題と展望

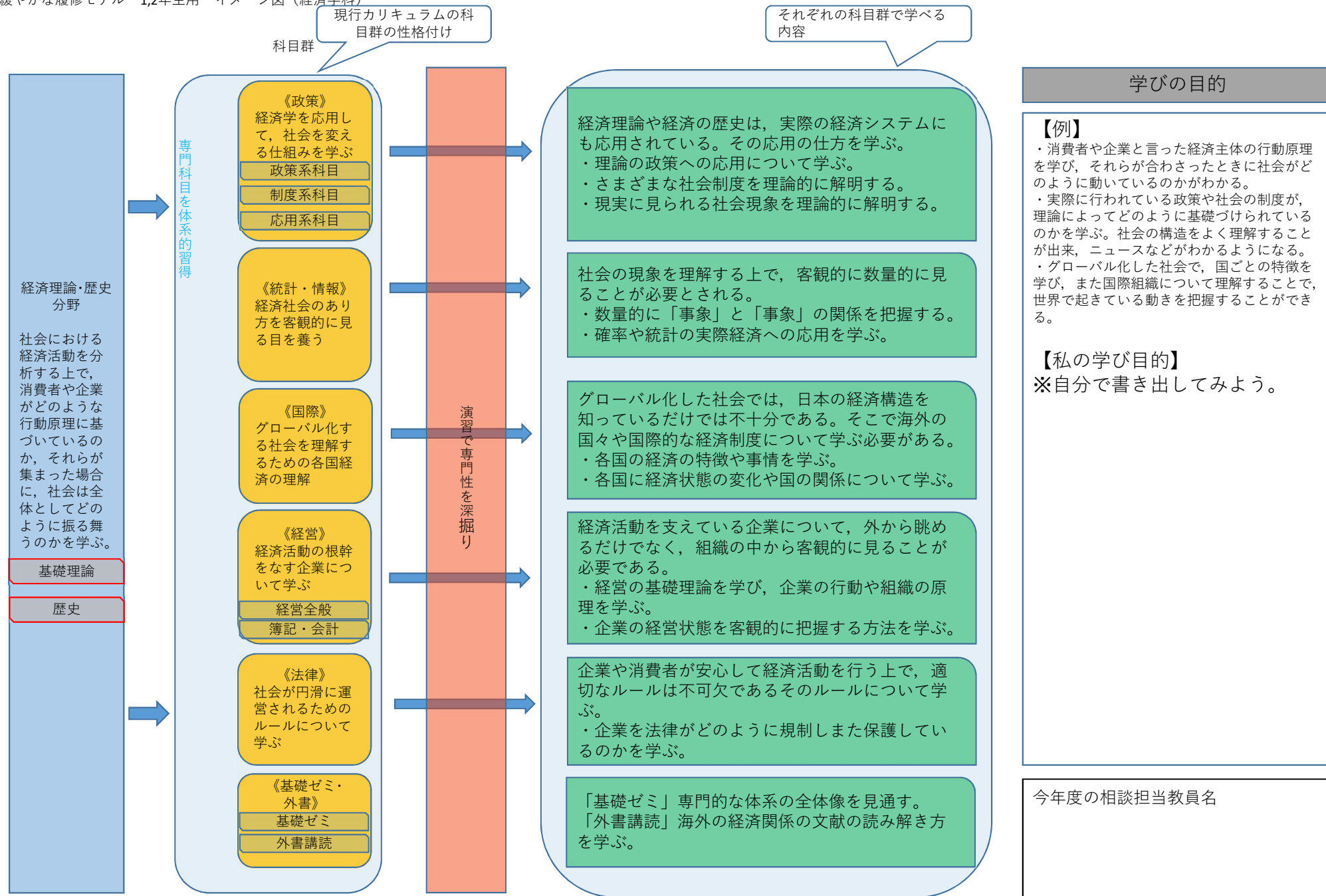
2019年度は、例年通りの授業公開・授業評価などが実施されるとともに、「緩やかな履修モデル」の提示を通じた教育改善の足がかりがとりあえずできた。非公式の活動の中で特に

経済学部で議論すべきとされたのが、教学 IR の立ち上げに向けた対応である。ただこれについては、「学内外研修」の項目でも述べられているとおり、福井県内大学の先行事例から明らかなように、まだ手探りの状態であるのも事実である。長期的には、適切な情報収集と合理的な統計手法により教学 IR が授業改善に結びつくような仕組みがほんとうに作れるかどうかにかかっている。数値管理の行きすぎについての議論が活発な状況の中で、数値の一人歩きでない、意味のある授業改善に結びつけられるかが鍵になるだろう。

今後の課題としては、上記履修モデルの改善とともに、今述べた教学 IR 部会の立ち上げに伴う学部レベルでの具体的かつ意味のあるリサーチ・クエスチョンの提示が挙げられる。すでに述べたように、学部では公式非公式の懇談会でいくつかの考えも示されているが、全学的な教学 IR の進行に合わせて、今後さらに議論を深めていく必要がある。

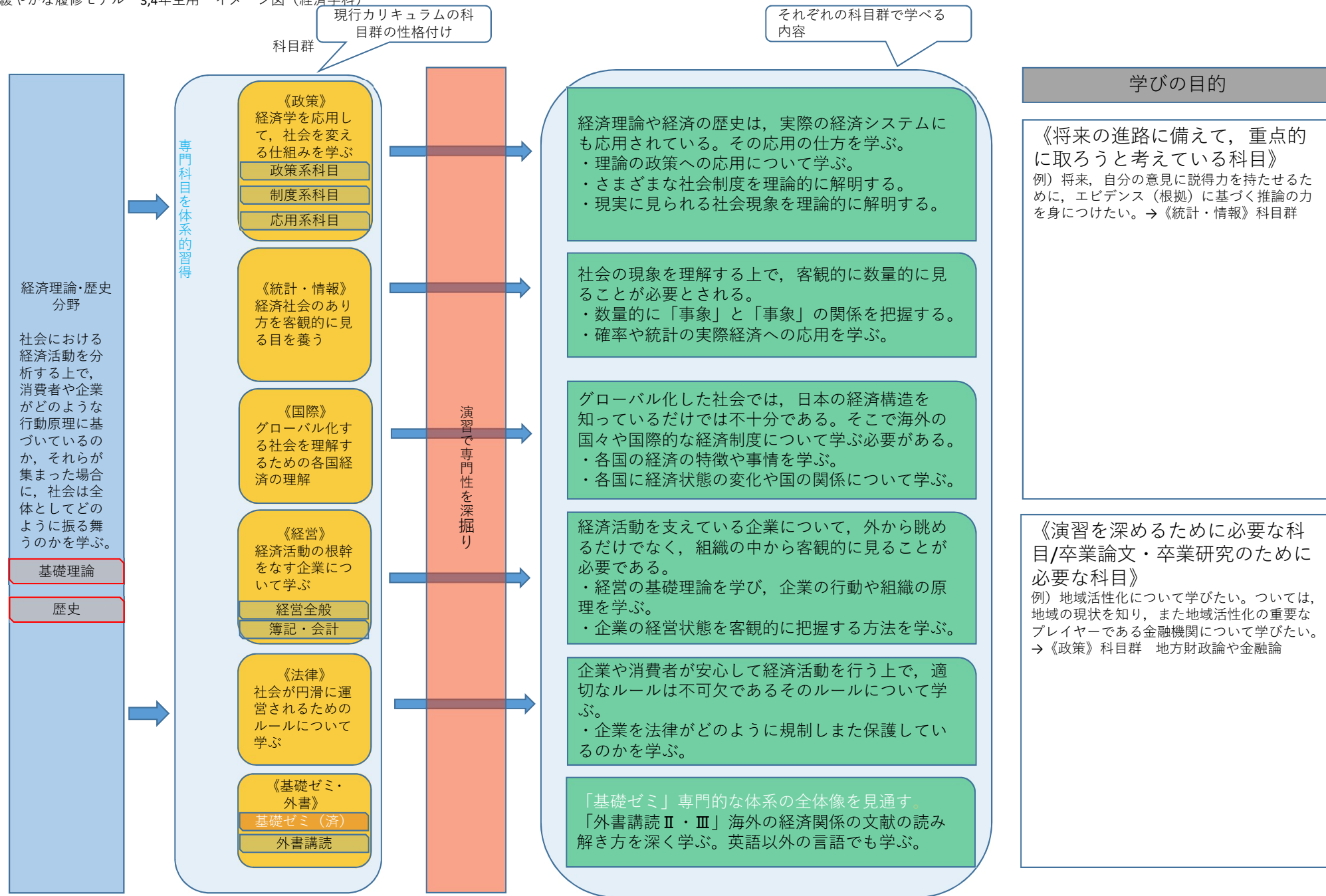
もうひとつ重要な課題がある。今年度末から新型コロナウイルス感染症が流行し、2020 年度の授業に大きな影響をもたらすことが懸念される。すでに様々な受講制限がかなり現実的と見なされているし、場合によっては大学閉鎖による一斉遠隔授業の可能性も取り沙汰されている。今後については、インフルエンザや感染症等の流行のみならず、台風や豪雪、地震等の自然災害発生のリスクも考慮に入れる必要があり、遠隔授業への備えは必要不可欠になるものと考えられる。そのため、遠隔授業については全学的な取り組みを要するとともに、経済学部においてもその実施の効果や問題点に関する情報共有、遠隔授業実施のための講習会の開催などについて、学部ならではの対応が FD 活動の重要課題になると考えられる。さらに、その効果をめぐる評価やノウハウの蓄積を通じて、平常時に戻った場合にいかにその経験を生かすかも問われるようになることも予想される。

授業改善の不断の努力が試されることになるだろう。



※履修上の注意

- ・大学の4年間で、どんなことを学ぶのか、それぞれの学問体系を俯瞰して考えてみて下さい。
 - ・今学期・今年度に履修予定の科目（群）で、こういったことを学ぶのか、考えて登録しましょう。
- それぞれの科目ごとの履修概要・目的は、シラバスに記載されています。必ず確認しましょう。



※履修上の注意

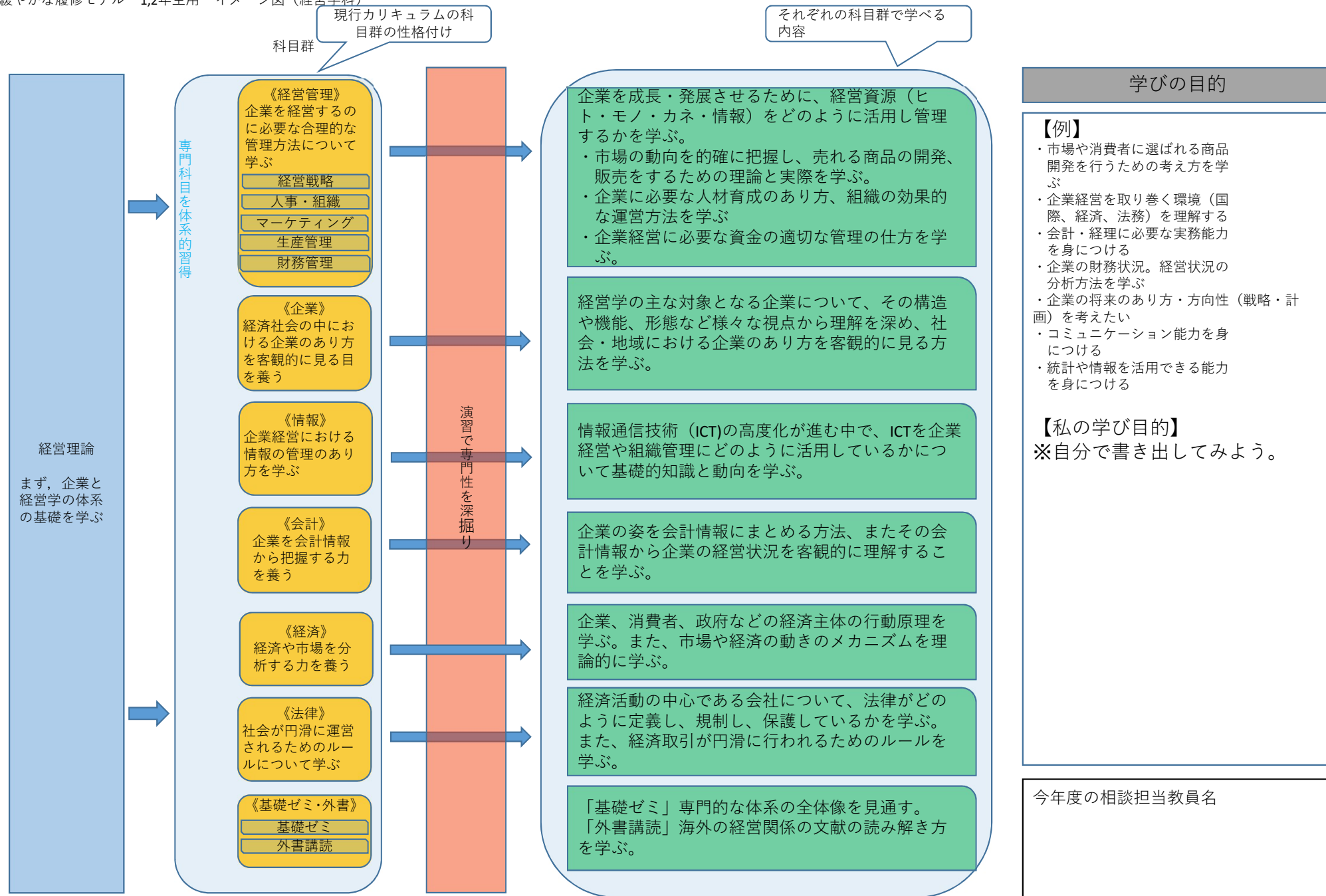
- ・大学の4年間で、どんなことを学ぶのか、それぞれの学問体系を俯瞰して考えてみて下さい。
 - ・今学期・今年度に履修予定の科目（群）で、こういったことを学ぶのか、考えて登録しましょう。
- それぞれの科目ごとの履修概要・目的は、シラバスに記載されています。必ず確認しましょう。

将来を見据えた履修計画の例（履修しておきたい科目の例）

	1年次	2年次	3・4年次	学ぶ目的・将来の展望
履修例 1	ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ	経済政策 財政学 文化経済学	地方財政論 公益事業論 地域経済論	地域・社会と深く関わることを目指したい（ex.公務員、NPO等）
履修例 2	ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ	国際経済学 A・B 中国経済論 ロシア経済論 世界経済論	開発経済論 中国の企業と経済	世界と関わる仕事をしたい（ex.企業の海外営業など）
履修例 3	ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ	経済人口学 日本経済史 社会保障論 労働経済学	アジア経済史	社会の仕組みをしっかりと学びたい（ex.教員など。あるいは仕事以外のボランティア活動など。）
履修例 4	ミクロ経済学Ⅰ・Ⅱ マクロ経済学Ⅰ・Ⅱ	計量経済学 経済統計学	農業経済学 環境経済学 公益事業論	経済活動を具体的かつ客観的に分析したい（ex.金融機関、シンクタンク等）
履修例 5	同上 +経営学総論	金融論 中小企業論Ⅰ・Ⅱ	ファイナンス理論	金融に関わる仕事をしたい（ex.金融機関等）

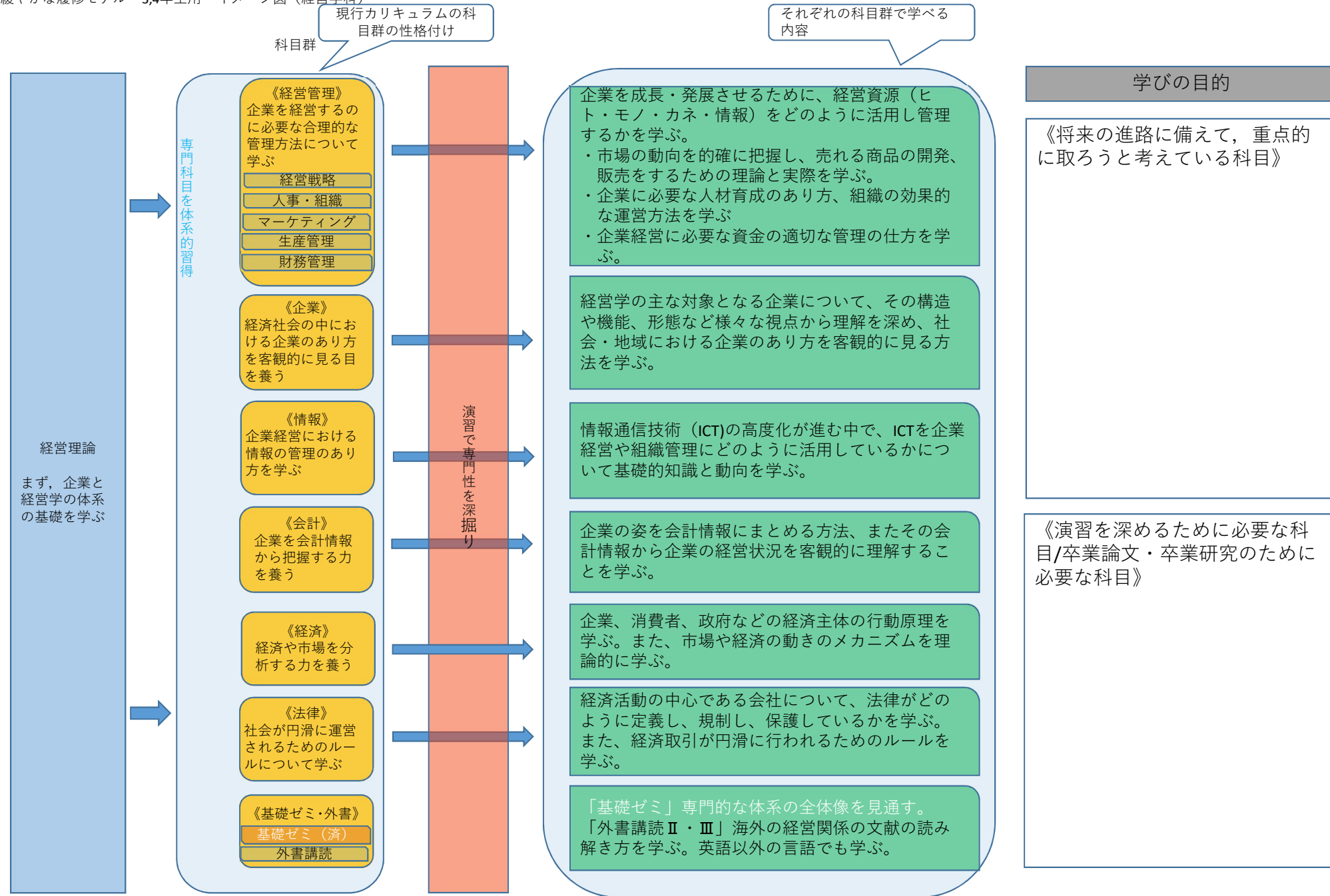
私の履修計画 （学ぶ目的や将来の展望を考えて、自身の履修計画を作りましょう）				
---	--	--	--	--

※幅広い知識を修得していることも社会人として大切なことです。関心・興味のある科目も加えて4年間で必要な単位数が取得できるように計画的に履修してください。



※履修上の注意

- ・大学の4年間で、どんなことを学ぶのか、それぞれの学問体系を俯瞰して考えてみて下さい。
 - ・今学期・今年度に履修予定の科目（群）で、こういったことを学ぶのか、考えて登録しましょう。
- それぞれの科目ごとの履修概要・目的は、シラバスに記載されています。必ず確認しましょう。



※履修上の注意

- ・大学の4年間で、どんなことを学ぶのか、それぞれの学問体系を俯瞰して考えてみて下さい。
 - ・今学期・今年度に履修予定の科目（群）で、こういったことを学ぶのか、考えて登録しましょう。
- それぞれの科目ごとの履修概要・目的は、シラバスに記載されています。必ず確認しましょう。

将来を見据えた履修計画の例（履修しておきたい科目の例）

	1年次	2年次	3・4年次	学ぶ目的・将来の展望
履修例 1	経営学総論Ⅰ・Ⅱ 企業論	中小企業論Ⅰ・Ⅱ 地方公企業論	営 組織論 公益事業論 地方財政論 地域経済論	地域・社会と深く関わることを目指したい (ex.公務員、NPO等)
履修例 2	経営学総論Ⅰ・Ⅱ 企業論	人的 理論Ⅰ・Ⅱ 経営組織論 労働経済学 会社法	情報 理論	人事・組織に関わることを目指したい (ex.企業の総務・人事など)
履修例 3	経営学総論Ⅰ・Ⅱ 簿記原理 簿記論Ⅰ	簿記論Ⅱ 原 計 論Ⅰ・Ⅱ 会計学Ⅰ・Ⅱ 経営財務論	経営分析論 理 会 計 論 務 会 計 論	経理・会計に関わることを目指したい (ex.企業の経理・財務など)
履修例 4	経営学総論Ⅰ・Ⅱ	経営 論Ⅰ・Ⅱ 原 計 論Ⅰ・Ⅱ	生 理論Ⅰ・Ⅱ	モ づくりに関わることを目指したい (ex. 造業の企画など)
履修例 5	経営学総論Ⅰ・Ⅱ	経営 論Ⅰ・Ⅱ マー ティング論 国際経済学	国際経営論 国際マー ティンク 論	世界を相 にして、 ービス を るような仕事をしたい (ex. 社、企業の海外支 など)

私の履修計画 (学ぶ目的や将来 の展望を考えて、 自身の履修計画を 作りましょう)				
---	--	--	--	--

※幅広い知識を修得していることも社会人として大切なことです。関心・興味のある科目も加えて4年間で必要な単位数が取得できるように計画的に履修してください。

2.2 生物資源学部

2.2.1 授業評価

学部の授業評価結果は、「意欲的受講」前期3.26＋後期3.29（前年3.29＋3.23）、「授業方法」前期3.37＋後期3.39（前年3.39＋3.37）、「内容理解」前期3.15＋後期3.17（前年3.22＋3.15）、「関心」前期3.21＋後期3.22（前年3.26＋3.17）、「総合評価」前期3.37＋後期3.41（前年3.41＋3.36）であり、前年と大差はなかった。直近の4年間はそれ以前の2年と比べてすべての項目で高い評価が得られている。

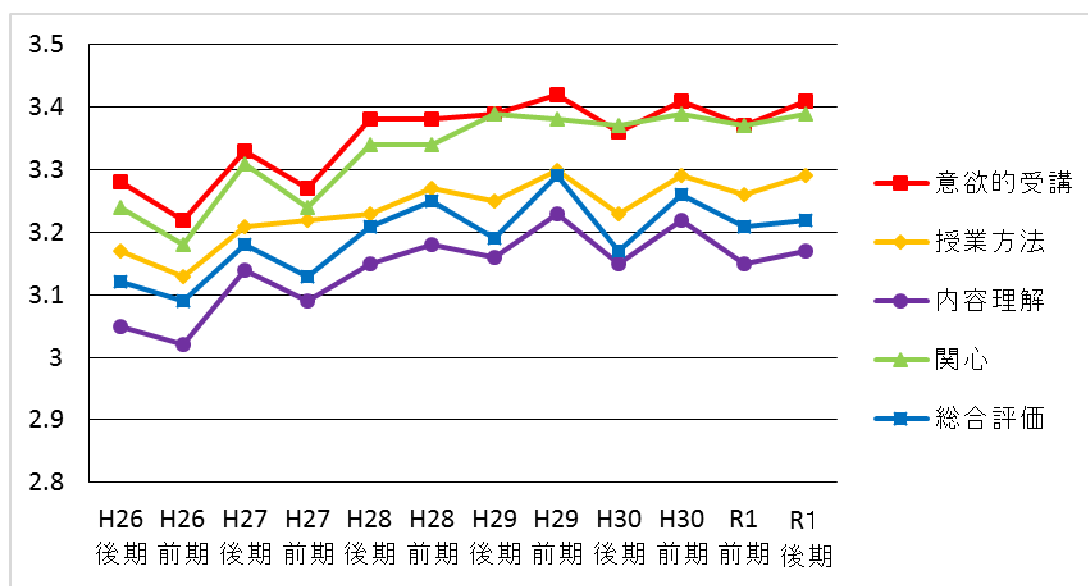


図 生物資源学部授業評価の経年推移

大学院の授業評価結果は、「意欲的受講」前期3.28＋後期3.46（前年3.39＋3.22）、「授業方法」前期3.51＋後期3.54（前年3.50＋3.44）、「内容理解」前期3.05＋後期3.25（前年3.22＋3.15）、「関心」前期3.26＋後期3.61（前年3.45＋3.34）、「総合評価」前期3.46＋後期3.64（前年3.56＋3.43）であった。総じて、良好に講義が進められていると判断した。

2.2.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

生物資源学部では、各教員が、必要に応じて自分が担当していない講義を聴講し、授業内容を直接確認できるよう、全講義を対象に、希望者が事前に担当教員に連絡することでいつでも参観できる「随時公開制」を採っている。

(2) 実績

今年度、担当外の講義を参観した教員はいなかった。

2.2.3 授業改善の取り組み

1) 海洋生物資源学部・恐竜学研究所との合同 FD 研修会

生物資源学部では、毎年、理科系部局（海洋生物資源学部、恐竜学研究所）合同で、研修会を実施し、教員間の分野横断的な研究・教育のための情報交換の場を設けている。各部局の若手教員が自身の研究・教育活動について紹介し、活発な議論が交わされた。

日時：令和元年 12 月 20 日（金）14：40～17：00

会場：永平寺キャンパス L103 教室

参加者：生物資源学部、海洋生物資源学部、および恐竜学研究所の教員

プログラム

- 「液液界面における電気分析化学」坂江 広基（生物資源学部）
- 「ピコ藻類パルマ藻の形・生理・生態」山田 和正（海洋生物資源学部）
- 「雌雄異株植物ヒロハノマンテマの研究：植物巨大 Y 染色体との格闘」風間 裕介（生物資源学部）
- 「魚類の粘膜抗体 IgT」瀧澤 文雄（海洋生物資源学部）
- 「討論会 および FD 座談会」

2) 教員へのアンケート

生物資源学部では、各教員が、学生の理解を助けるために行っている、授業（学生実験を含む）上の工夫を調査により収集し、全教員でその情報を共有する取り組みを行っている。

本年度は、「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」を調査した。

・教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること

授業中に受講生がスマホなどを使って質問・コメントをリアルタイムにスクリーンに流せるツールを活用して授業の双方向性を高めました。
授業内容の概要を理解するために、可能な場合は動画を用いる。
身近な食品を例に取上げて、親近感を抱けるように工夫した。また Powerpoint で写真や図をつかったりしながら健康維持に必要な食品の性質や役割を説明することで、理解の助けとした。さらに、小テストを使って、学習の助けとした。
本講義内容（生物物理化学 I）を修得するには、物理と数学の基礎的知識が必要であり、本学科の学生にとっては不得意な科目に分類されると認識している。そこで、講義を進めるうえでは、本講義を理解する上で必要となる物理と数学の基礎的事項について丁寧な説明を心がけ、また講義時には演習問題を多くとり入れるなど、学生の理解度が少しでも向上するように努めている。
これまでミニッツペーパーを授業の後半に配布していたが、講義の冒頭に配布するようになったところ、記述内容が少しは増えたような印象を受けた。しかしながら、講義内容に関する質問を記入してくる学生はほとんど固定されており、学生全体の理解度、興味の程度を把握することは困難であった。配布する資料については、あらかじめ少しでも目を通してもらうよう、できるだけ授業で説明する前の週までに配布するように心がけた。
新聞記事、ニュースにある食品衛生の講義内容に関連した食品関連事故を多く扱い、学生の

関心を引くような授業を心掛けている。

中間試験を 2 回実施し、学生同士がディスカッションしながら問題を解く時間を設けて、学生の意欲向上を図っている。

2.2.4 授業改善活動についての課題と展望

授業評価の結果からは、最近 3 年間の評価と同じく、総じて良好な講義が進められていることがうかがえる。例年、「内容理解」の項目が他と比べて低いことから、教員個人個人で授業方法の改善を通じて学生の理解度を高めるような工夫をする必要がある。

「教員個人が授業改善や学生の意欲向上のため工夫していること」のアンケートを実施したところ、スマホを利用した双方向授業への取り組みや、動画など学習効果の高い教材を使用するなど、様々な工夫が多数あり、このような授業改善への取り組みが今後の授業評価におけるよい評価につながることを期待される。各教員の取り組みを学部全体で実施していくことで、学生の学習意欲の向上および内容の理解につなげていく必要がある。

2.3 海洋生物資源学部（佐藤晋也）

2.3.1 授業評価

2019年度の授業評価への参加教員数は前期が16人、後期は13人であった。少人数のために実施しなかった科目を除き、ほぼ全ての科目で実施された。また、それぞれの教員は自由記述に対して、具体的な改善方法を提示するなど丁寧なコメントを公表していた。平均得点は、前期・後期ともに全ての項目で全学平均をわずかに下回っていた。今後も学生がより理解しやすく関心を持てるよう、継続的に授業内容の改善を心掛ける必要があるだろう。

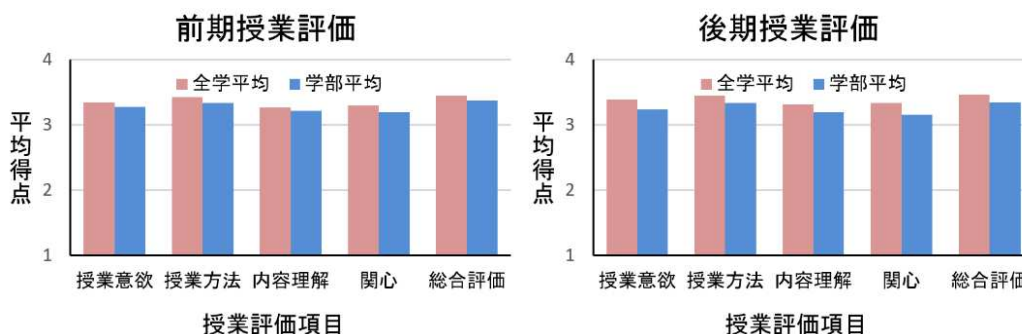


図 2019年度前期および後期の海洋生物資源学部の授業評価結果

2.3.2 授業公開の方針と実績

(1) 方針

授業公開は、普段知ることのない他の教員の授業に参加し、担当教員や他の授業参加者との意見交換を通じて、自分の授業をより良いものにするためのヒントを得る機会の提供を第一の目的とする。授業公開は大学教育における画一的で理想型の模範授業を目指すためのものではなく、教育の自由が保障されるなかで、個々の授業内容に合わせたより特色のある授業を継続的に育むことが大切である。そのため、授業の内容について批判を行うのではなく、お互いを尊重しながら、特に授業の方法について教員同士が学び合うことを趣旨として実施している。

2019年度は前期に一回の授業公開を実施した。次年度以降は学部の方針として、前年度授業評価において各項目で高い評価を受けた授業を公開し意見交換することにより、授業評価のフィードバックを通じた教育の質の向上を目指すことを確認した。また、新任教員が増えることが予想されるため、年2回程度は授業公開を実施し、新任教員と在任教員の間で意見交換できる機会を提供するよう努める。

(2) 実績

2019年度は1回の授業公開を実施した。参加教員数は海洋教員23名中6名と低く、次年度以降はより積極的な参加を呼びかけ、授業改善の有効な場となるよう努める必要がある。

今年度の授業公開は富永教授によりLL教室にて開講されている「生物資源統計学」を対象として開催された。今後多くの講義でコンピューターを使用する機会や必要性が増すことと思われ、そのため本授業ではどのように講義を進めているのか知り、またその方法について検討する機会と位置付け実施した。

公開科目名：生物資源統計学（3年生対象） 担当：富永教授

公開日時：2019年11月6日（水）

・授業見学：9:00～10:00（交流センター 2F LL教室）

参観教員は調査票に感想などを記録

・検討会：10:00～10:30（学部棟 1F 会議室）

参観教員の調査票をもとに意見の交換を行う

参加人数：6名（大泉・末武・東村・瀧澤・佐藤・山田）

参加者の意見は以下の通り。

1) 工夫されている点、参考になる点

- ・テキストがしっかりしていて自主学習に向いている
- ・授業の冒頭に前回のまとめと今回のトピックを提示している。
- ・語句の意味をていねいに説明している。
- ・具体例と結び付けて説明している。
- ・毎回予定通りに講義が進められている（と推測した）ので、学生は勉強を進めやすいだろう。
- ・前回の復習と、それが今回の講義にどのように繋がるかの解説があった点。
- ・講義冒頭で理解すべきキーワードの板書があることで、今日の講義の目的が明確になると感じました。
- ・水槽中のヒラメのサイズなど、実際の具体例をイラストと共に説明することで、今日学ぶことの使い道がイメージしやすかったです。講義を聞くモチベーションを高めることにも有効であると感じました。
- ・マウスでスライドを指し示しながら説明をすることで、何について話しているのかがわかりやすかったです。
- ・前回の復習から入り、授業で覚えてほしいことは、予め強調して説明している。
- ・大事なことは、黒板に書く。スライドに書いてあっても書く。
- ・身近な例を出して説明する。

2) 改善したらよいと思われる点

- ・情報量が多い
- ・黒板の下に板書するとモニターの影になって見にくい。
- ・少人数の利点を生かして学生の理解度を確認する時間があっても良いのではないかと（学生に答えさせる）
- ・先生が板書しているのに、それを学生がノートに書いていたりする様子が見られなかった。
- ・重要な単語などを書いていらしたと思うので、板書を写すように指示された方が良いかも。最初の講義などで指示されているのかもしれませんが...
- ・LL 教室でスクリーンを使わない場合には、マウスでスライドを指さずに説明をする、スライドとの対応が取りづらくなるかもしれないと感じました。
- ・LL 教室での講義では、学生の顔が見にくいので、理解度の確認が難しいように感じました。
- ・マウスのカーソルでスライドの説明をしていたが、数秒経つとカーソルが消えてしまう。ペンやレーザーポインター機能で説明すると良いかもしれない。

3) その他意見、感想

- ・E X C E Lを使った演習の所を見たかったです（私は手計算するとずっと思っていました）。
- ・スライドは、いつの段階でF レックスにあげていらっしゃるのか知りたかったです（前日とか、数日前とか）。
- ・細胞免疫学のビデオ講義で散々な評価を得たが、LL 教室での半対面式の講義でも学生の顔を確認しづらいことや、どこに対して講義すれば良いのか分からない難しさがあると感じた。
- ・理解させたり、話を始めたりする際の間を上手く使っていたので、是非参考にしていきたい。
- ・スライドを作るのに相当手間がかかってそうでびっくりしました。
- ・大変勉強になりました。どうも有難うございました。
- ・講義導入部など、学生の興味を惹き、理解度を高める様々な工夫がわかり、大変勉強になりました。

2.3.3 FD 研修への参加

1) 若狭高校 公開授業および授業研究会

日時：令和元年 11 月 14 日（木）

会場：若狭高等学校

参加者：佐藤・細井

若狭高校にて開催された公開研究授業に参加した。「コミュニケーション英語Ⅱ：Lesson 8, Miu and Mima, Friendly but Tough Competitors」は進行や解説などほぼすべて英語で行われた。授業内容は分刻みで決められており、開始時に内容と目標が示されることで、学生が授業のねらいを理解したうえで課題に取り組む事ができるよう工夫されていた。課題となる文章の理解や内容のまとめはグループ単位で行い、その間教員は教室内を巡回し積極的にコメントはするものの、基本的に話し合いはグループ内の進行に委ねられていた。課題の内容を各自が理解するだけでなく、内容を咀嚼し自分の意見として表現するところまでを求めており、これにより題材を深く考える機会が与えられていると感じた。「生物基礎：体内環境の恒常性」では体内環境という用語についての考察を通じて、体内の環境を一定に保つことの重要性を理解することを目的としていた。体内環境という言葉から連想する事象を挙げさせ、グループでの相談も交えつつ、教員は様々な意見を吸い上げ軌道修正を加えていた。これにより最終的に「呼吸」が息をすることとは別の現象であるという理解に辿り着かせることが出来たという点で、教育効果の高い授業であったと感じた。

今回参加した授業ではどちらもアクティブラーニングの形式を取り入れており、グループワークを通じて自分の考えを班員に分かり易く説明し、また他者の意見を理解し比較検討する能力を養うこと目指していた。授業を通じて、学生は日頃から積極的に発言することが期待されており、また教員も全ての意見を拾い、たとえ答えが間違っているとしてもそれぞれに丁寧にコメントしてくれるといった信頼関係が築かれていることが見て取れ、自身の講義中に学生の発言を促すうえでも大いに参考にしたいと感じた。一方で、グループワークにおいて発言に消極的な学生もいる中で、一部の積極的な学生の意見に引っ張られるような傾向もみられ、グループ編成やきめ細かなフォローの大切さについても認識した。どちらの授業も2年生を対象としており、既に基礎的な知識を持ち合わせた状態で、それらの知識を駆使して課題に取り組むという狙いをもった授業であった。こうした授業では学生間の議論を主体としたアクティブラーニングは理想的と思われる。ただし、本学での専門性の高い講義などでは、用語や事象を解説するようなスタイルにせざるを得ない局面もあり、必ずしも全講義に対してアクティブラーニングが理想的であるとは限らないとも感じた。

2) 生物資源学部・恐竜学研究所との合同 FD 研修会

日時：令和元年 12 月 20 日（金）

会場：永平寺キャンパス L103 教室

参加者：海洋生物資源学部、生物資源学部および恐竜学研究所の教員

プログラム

演題 1. 14:40 – 15:10 「液液界面における電気分析化学」

坂江 広基 (生物資源学部)

演題 2. 15:10 – 15:40 「ピコ藻類パルマ藻の形・生理・生態」

山田 和正 (海洋生物資源学部)

演題 3. 15:40 – 16:10

「雌雄異株植物ヒロハノマンテマの研究：植物巨大 Y 染色体との格闘」

風間 裕介 (生物資源学部)

演題 4. 16:10 – 16:40 「魚類の粘膜抗体 IgT」

瀧澤 文雄 (海洋生物資源学部)

演題 5. 16:40 – 17:00 「討論会 および FD 座談会」

本学では部局を超えた研究・教育交流は増えつつあるが、海洋生物資源学部はキャンパスが独立しており、残念ながら分野間の意見交換や交流は限定的になりがちである。そこで理科系3部局の教員による分野横断的な研究・教育のための情報交換の場を設けることを目的とし、本FD研修会を実施した。当日は上記のプログラムに沿って進行し、各部局

の若手教員が自身の研究・教育活動について紹介を行い、またそれぞれの発表に対し活発な議論が交わされた。他分野における研究・教育の実践状況を把握し深く議論することで、新たな視座や共通認識が増し、教員の研究力・教育力向上のみならず、分野横断的な共同研究の機運醸成にもつながる取り組みとなった。

2.3.4 授業改善についての課題と展望

海洋生物資源学部における今後のFD 活動方針

年2回程度、授業評価をふまえた授業公開を行う。その際は、前年度授業評価において各項目で高い評価を受けた授業を公開し意見交換することにより、授業評価のフィードバックを通じた教育の質の向上を目指す。また、授業改善検討会を通じて、教員の間で自由に意見交換できる機会を提供し、新任教員にも参考になるような体制を構築していく。

2.3.5 その他

F レックス LMS 活用実績

2019 年度における海洋生物資源学部の F レックス LMS 活用実績は、開設数が 32 科目（前期 19、後期 13）で、昨年より 3 科目増加した。今後より積極的な利用を後押しするため、講習会の実施などが必要と思われる。

2.4 看護福祉学部

本年度実施した授業評価、授業公開、授業改善への取り組み、FD 研修、授業改善についての課題と展望を以下に報告する。

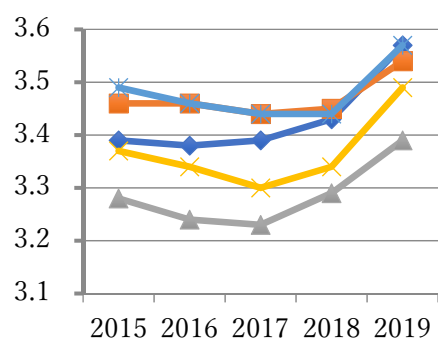
2.4.1 授業評価

2.4.1.1 看護学科

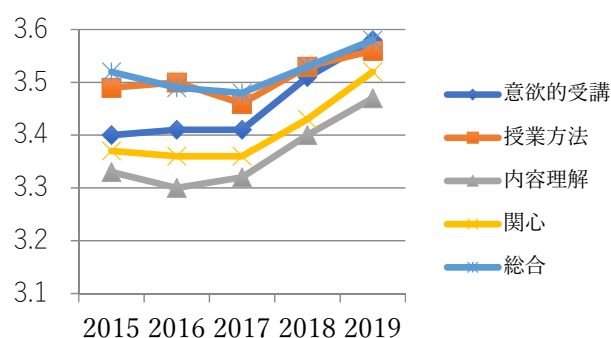
授業アンケートの結果について、まず昨年度と比較してみると、前期後期ともに全ての項目において上昇した。5年間の推移においても、2017年以降前期後期ともに全ての項目において上昇した。

また、項目別得点においては、前期後期の何れの年度も「意欲的受講」と「授業方法」は高く、「内容理解」が最も低かった。

以上の通り、アンケート結果からみた授業評価は概ね上昇したが、項目別で見ると「意欲的受講」が高いにもかかわらず、「内容理解」と「授業への関心」が低い傾向にあることから、「内容理解」と「授業への関心」を促すべく「授業方法」の見直しおよび改善を図る必要があると考える。



看護学科 授業アンケート結果(前期)



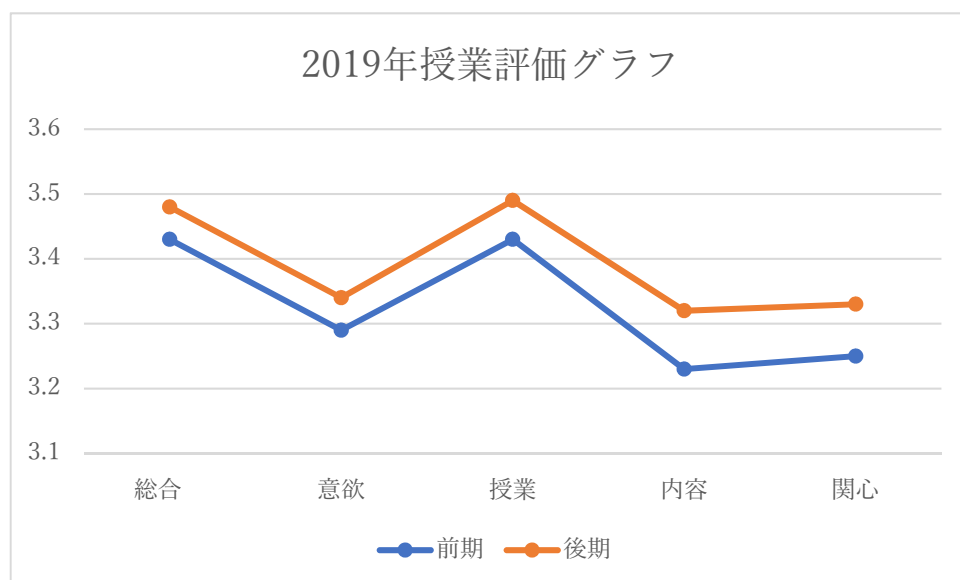
看護学科 授業アンケート結果(後期)

2.4.1.2 社会福祉学科

2019年度後期項目においては、前期項目のすべてより上昇している。前期に培った知識・技術等々が後期科目に反映しているのではないかと推測できる。特にポイントとして高い変化があったのは、内容の変化であり、次に、関心度が高くなっている。これは、授業を受けていく段階で、教員の授業内容の充実とそれに伴う学生一人ひとりの興味、関心度の高さがうかがい知るところとなったように考える。今後も、コンマ以下の変化とはいえ、全ての項目において上昇傾向になるトレンドを創出することを継続的に深長させていかなければならないと感じる。また、今後学生の興味関心が多様化することに鑑みて、社会福祉関連教科の内容の充実と拡張を今後分析していく必要がある。

ただし、社会福祉学科においてはオムニバス授業が多く、その意味では現行の授業評価方法は必ずしも学科全体の動向を表すものではないことに注意が必要である。

	2018 年		令和元年度	
	前期	後期	前期	後期
総合	3.46	3.42	3.43	3.48
意欲	3.32	3.31	3.29	3.34
授業	3.44	3.42	3.43	3.49
内容	3.25	3.21	3.23	3.32
関心	3.3	3.27	3.25	3.33



2.4.2 授業公開

2.4.2.1 看護学科

看護学科では例年、前期、後期にいくつかの科目で随時公開しているが、参観した教員はいない。実質的に授業公開が成立しないのは、看護学科の授業カリキュラムでは座学の授業だけではなく、演習など複数の教員がかかわることや学外実習（臨地実習）があり時間割がタイトであることも要因のひとつと考えられる。現状では、担当する教員同士で教育方法や授業改善について適宜、ワーキングや検討を行っている。以下（2.4.3.1、2.4.4.1）で、看護学科独自の教育方法や授業改善への取り組みについて報告する。

2.4.2.2 社会福祉学科

社会福祉学科では、2019年度は授業公開を行わなかった。これまでの公開で参観者がほとんどいなかった理由としては、学外実習（ソーシャルワーク実習、精神保健ソーシャルワーク実習）や演習科目が多く時間割がタイトであることがまずあげられる。ただし現状として社会福祉学科独自の取り組みが行われているので、以下に報告する。

2.4.3 授業改善への取り組み

2.4.3.1 看護学科

2017年度より、教育理念に基づく発展的かつ柔軟な教育改善を目指すとともに、看護学教育の水準の向上を諮ることを目的とした看護教育協議会（通称：教員会議）を設置し、看護教育について話し合いがなされている。

2.4.4 FD 研修

2.4.4.1 看護学科

1) 研修会に関しては、2019年度は、発達障害をもつ学生への対応に関する研修会に多く参加した。のべ10名の教員が、「発達障害を持つ学生への関わり方」（看護基礎教育検討委員会・研修会、福井大学医学部・小坂浩隆先生）、「おとなの発達障害の理解 ～適切な関わり方を学ぶ～」(保健師職能集会・研修会、福井大学医学部・小坂浩隆先生)、「対応困難な学生の事例から学ぶ具体的な

対応方法について」(看護基礎教育検討委員会・研修会、福井県立大学・清水聡先生)、の3つの研修会に参加し、発達障害が疑われる対応困難な学生への対応について知識を深めた。

国際交流に関しては、2016年度の米国オハイオ州フィンドレー大学(以下 UF)との学術交流協定の締結に基づき、2017年度からUFからの短期留学生を受け入れている。2019年度は、留学生2名と教員1名を受け入れ、約3週間の日程で、看護学科の授業への参加や、医療・福祉施設への視察、学生間・教員間の意見交換などをおこなった。また、2017年度からは、2週間程度のUFへの看護短期研修を行っている。2019年度は看護学科2年生3名と教員1名が参加した。UFの授業への参加や、米国の医療・福祉施設への視察、UFの教員や学生との交流などを行った。これらの交流により、米国と日本における看護や教育に関する知識を深めた。

【具体的な活動内容】

研修:「対応困難な学生の事例から学ぶ具体的な対応方法について」

日時:2019年11月30日

場所:福井県看護協会

講師:福井県立大学 清水聡先生

参加者:上木礼子講師、金粕仁美助教

所感:

本研修は、看護基礎教育検討委員会主催によるもので、6月の小坂浩隆先生の講義内容を基に、対応困難な学生への具体的な対応方法を検討するという研修内容であった。看護系学校でみられがちな対応困難な場面を基に、周囲はどのように感じるか・本人はどのように感じるか・結果としてどのようなようになるかについて、具体的に教えていただき、対応困難な学生の考え方を理解できたと感じる。また、学生への配慮についても、悪い部分だけでなく学生の良いところも伝える・学生が見通しの持てる環境にする・気になる学生の言動には反応しない・学生が身につけるべきことの優先順位を考える・学生に複数の指示を出さないなどの、具体的な助言を頂いた。特に実習では、発達障害の診断の有無にかかわらず、学生との関わりで対応が困難だと感じる場面がある。実習は、大学内での講義や演習とは異なり、病院などの施設で患者や看護師などに関わるため、学生も初めての体験や慣れない環境で困惑したり、難しさを感じたりするためではないかと思われる。そのため、特に実習においては、学生の置かれた状況を理解した上で、学生が学びを深められるよう、今回の研修内容を生かして関わりたいと考える(金粕仁美)。

研修:「おとなの発達障害の理解 ～適切な関わり方を学ぶ～」

日時:2020年2月15日

場所:福井県看護協会

講師:福井大学医学部 小坂浩隆先生

参加者:大川洋子学科長、上木礼子講師、應戸麻美助教、坂部敬子助教、三好良子助教

所感:

本研修では、小坂先生浩隆先生をお招きし、おとなの発達障害について身近な人や場面、自分の傾向と照らし合わせながら理解し、その後、職場、家族の対応方法および本人にできることを学んだ。その中で、発達障害は生来の障害であるが知的レベルが高い・周囲の環境が温かいと気づきにくく、本人も家族も発達障害が存在していることに気づかずに大学に入学してくること、大学入学後は

独居生活になったり勉強方法が高校と変わったりするなど、生活の変化により周囲のサポートが受けられない・ストレスがかかることによって発達障害の症状が顕在化することが説明された。発達障害が疑われる学生の周囲の人たちが、注意欠如多動症(ADHD)や自閉スペクトラム症(ASD)などの発達障害の特徴を理解し、学生をサポートしていくこと(環境)が必要である。

研修会に参加して、あらためて発達障害についての知識を深め、発達障害が疑われる学生ひとりひとりを理解して関わる必要があると理解した。その上で、発達障害が疑われる学生の授業、演習、実習、および学生生活に対する困難さを少しでも軽減できるよう支援していくことが求められると考えられた。さらに、発達障害が疑われる学生をどのように社会に送り出すのか、看護職として働く姿を学生とともに考えていく必要があるのではないかと考えた。本研修会は保健師職能研修であったが、助産師や看護師も多く参加され、看護職のおとなの発達障害についての関心は高く、発達障害が疑われるスタッフへの対応に悩んでいる職場があることもわかった。現場の看護職の声を聴くこともまた、発達障害が疑われる学生支援を考えていく上で必要ではないかと考えられた。今後は、発達障害が疑われる学生ひとりひとりへの具体的な対応について、組織としての対応もあわせて考えていく必要があるのではないかと考えられた(坂部敬子)。

研修:フィンドレー大学 看護短留研修

期間:2020年2月16日～3月2日

場所:フィンドレー大学(米国オハイオ州)

引率教員:金粕仁美助教

所感:

フィンドレー大学(以下UF)への看護短期留学は、2017年度から開始し、今年度で3回目である。教員1名が2年生3名の引率としてプログラムに参加した。プログラムでは、UFの看護学科と日本プログラムの授業に参加したり、医療・福祉施設に視察したりして、様々な人達と交流することができた。以下、看護教育に関連するものについて記載する。

①UF看護学科の講義・演習:

今年度は、基礎看護学の「服薬管理」に関する授業に参加した。UFでは、曜日によってクラスの時間が異なり、例えば月・水・金は50分授業、火・木は90分授業などになっている。水曜日に50分の講義をして、翌日の木曜日には3時間の演習をするという形で授業が進められていた。

水曜日の講義には、2年生の13名が出席していた。日本の場合、教員からの一方向の授業のイメージが強いが、UFでは教員から学生に問いかけをして、それに対し学生が自主的に発言するというスタイルで進められていた。米国の大学では、一般的に学生が各自予習をしてから講義に参加するため、このような方法が可能だということが理解できた。授業は全て英語で行われていたが、日本と共通する内容であり、本学学生も理解できる内容であった。講義は主に教科書に沿った知識の教示とその確認という形で進められており、グループワークや学生同士のディスカッションなどは含まれていなかった。

翌日の演習には、半分の学生が前半(8:00～11:00)と後半(11:00～14:00)に分かれて演習に参加していた。学生6～7人に対して教員2名の少人数教育であった。冒頭30分程度は、前日の講義内容の簡単な復習をおこない、その後、2～3人1組になって技術演習用モデル人形での演習であった。患者情報や医師の指示の書かれた紙カルテが準備されており、学生は、カルテの情報を確認しながらチェックリストに沿って実施していた。演習には「内服薬」、「点眼薬・点耳薬」、「塗布剤・

貼付剤・坐剤」、「吸入剤・点鼻薬」の4つのブースが準備されており、それぞれのブースで薬剤をモデル人形に投与するというものであった。日本の看護教育では演習で実施することは少なくなっているが、米国では多くのデモ用 (Demo Dose) 薬剤が演習等で使用されており、実習までに学生が体験できるように整えられていた。そのほかに、デモ用の赤血球濃厚液や新鮮凍結血漿も保管されており、輸血の準備等を演習で体験している。このように、実習で実施できない技術を優先的に演習として実施しているとのことであった。これらの技術は日本では現任教育で行われている。

演習後には、カルテ記載とレポート記載の時間として1時間程度設けられていた。米国では学生がPCを授業に持参することが一般的である。各自、持参したPC上でカルテとレポートを作成し、オンラインで提出していた。技術演習をするだけでなく、患者と医師の指示を設定した上で、学生が患者に薬剤を投与し、その内容をカルテに記載することで、薬剤投与の一連の流れが理解でき、より実践に即した演習になっていると感じた。また、米国の病院には、日本のように新人看護師のオリエンテーション期間がないため、学生のうちから病院の看護実践に合わせた教育をする必要性があるのではないかと感じた。

UFでは、1年生は主に一般科目を履修し、2年生から看護や医学の専門科目を履修することとなっている。専門的な授業の開始とともに、病院の看護実践に合わせた講義・演習をしていることが理解できた。

②UF看護学科の看護実習:

UFの学生が実習している St. Rita's Medical Center と Blanchard Valley Health System に訪問し、主に救急外来の Trauma room(外傷室)や ICU、産科病棟などを見学することができた。UFでは、看護実習に教員は引率せず、病院の看護師のみが実習指導をしているようであった。また、日本のようにグループで実習施設に行くという形ではなく、各学生が個人で病院実習をするようであった。詳細については確認できなかったが、St. Rita's Medical Center に訪問した際、UFの学生1名が、救急外来で実習を行っている様子を見ることができた。米国の病院は12時間ごとの2交代制であるため、学生は、それぞれの病院の日勤開始時間に合わせて朝の5時半や7時に実習を開始し、午後2時ごろまで実習した後、大学等で実習記録の記載をするとのことであった。

UFでは、日本のように講義や演習と実習がわかれておらず、領域毎に講義・演習・実習を繰り返し体験するようなスタイルで進められている。たとえば、1週間の中で、外科看護学に関する講義と演習を数日受講し、その後、病院で1~2日間、外科看護学の実習をする。領域毎に、この流れが一定期間、繰り返されるとのことであった。具体的な期間などは確認できなかったが、UF看護学科のカリキュラムでは、2年の春学期に Foundations of Nursing Practice(6単位)、3年秋学期に Medical Surgical Nursing I(6単位)、3年春学期に Maternal Child Nursing(6単位)、4年秋学期に Community/Population Health Nursing(4単位)と Medical Surgical Nursing II(主に老年期・6単位)、Mental Health Nursing(5単位)、4年の春学期に: Nursing Synthesis(領域選択・7単位)と Nursing Leadership and Management(4単位)を履修するとのことであった。

③病院における看護継続教育:

Cleveland clinic では医療従事者の研修センターを見学することができた。研修センターには、手術室や病室と同じ環境の部屋があり、事例をもちいたシミュレーション教育を行っているとのことであった。医療従事者は、年間に決められた回数の研修を受ける必要があるため、各自必要な研修を予約して受講する必要がある。視察時、小児科の看護師の研修中であり、一部を見学することができた。子どもは研修用モデル人形で、呼吸や脈などのバイタルサインを調整することができ、マイクを通じて

発言できるようになっている。母親役は役者が演じており、子どもの急変によって不安が強くなり、看護師にクレームをするという設定であった。

研修内容はすべて録画されており、実施後に自分たちの関わりがどうであったかを別室で振り返ることであった。研修センターの担当看護師は、実施後に自分の関わりをどのように振り返るかが重要だと言われており、米国の看護継続教育では特に振り返りや看護評価を重要視していることがうかがえた。

④米国の義務教育：

米国ではK(幼稚園年長)から grade 12(高校3年生)までが義務教育期間である。幼稚園と小学校(grade 1～5)は少人数制で、例えば視察した Riverdale Local Schools では、学年毎に10名程度のクラスが4つあるという感じであった。日本のように1時限目・2時限目などが決められておらず、休み時間もない。子ども各々が、教員の決めた学習内容を学習し、必要に応じてトイレなどに行くという形で授業が進められていた。また、中学生(grade 6～8)からは選択科目が始まり、一部の選択科目では教室を移動する形となる。高校(grade 9～12)は選択科目のみとなるため、生徒は受講する科目に合わせて教室を移動するという、大学と同様のシステムになっている。このような教育システムの違いにより、米国の大学生の主体性・自主性は、日本の大学生より高いのではないかと感じた。なお、Riverdale Local Schools にはKから grade 12 までの生徒が通っているが、Primary school、Middle school、High school と別れている学校もある。今回の研修中には、Jacobs primary school (School nurse と面談)や Findlay high school (School psychologist と面談)にも訪問する機会があり、米国と日本の義務教育や生徒へのサポート体制の違いなどについても知る事ができた。

⑤その他：

施設訪問(Family center、Nursing home、保育園など)や専門職との面談(Physician assistant、School nurse、School psychologist)、UF 学生との交流(看護学生や日本プログラムの学生)などの体験から、日本と米国の社会制度や医療制度、教育、文化、宗教の違いなどを知ることができた。

以上のことから、文化や宗教の違いだけでなく、米国と日本における看護や教育の相違点・類似点などについて知識を深め、国際的視野を広げることができたと感じている。今後、看護学科で共有し、看護教育に生かして生きたい(金粕仁美)。

2) 地域住民とのコミュニケーション演習(「基礎看護技術Ⅰ」の授業の一部として実施)

担当教員：教授 笠井恭子、講師 上木礼子、講師 東知宏

ねらい：

近年の核家族の増加、地域における人々の関わりの希薄化により、若者と高齢者との交流の場が減少している。若者のコミュニケーションの主な手段はSNSであり、人と人が直接対面してコミュニケーションをとるという経験をあまりしていない。この状況は看護学生でも同じである。将来、看護職を目指す学生にとって、人間理解(とくに超高齢社会においては高齢者理解が重要)、コミュニケーション能力の向上、想像する力・思考する力・実践する力の向上は必須の課題である。

そこで、2019年度の新しい取り組みとして、病院実習に出る前の1年生を対象に、高齢者との関わりをとおしてコミュニケーション能力を身につけるとともに、地域住民の生活と健康の課題について考えることをねらいとし、「地域住民とのコミュニケーション演習」を企画し実施した。

期間： 第1回:2019 年 6 月 15 日(土) 13:30～16:30

第2回:2019 年 6 月 29 日(土) 13:30～16:30

場所:新町ハウス

参加者:第1回 永平寺町健康長寿クラブの皆さま 15 名、本学看護学科1年生 26 名

第 2 回 永平寺町健康長寿クラブの皆さま 15 名、本学看護学科1年生 24 名

主な内容:

学生 5～6 人、高齢者 3 人を 1 グループとし、5 グループに分かれて交流座談会と輪投げ大会を行い高齢者との関係を築いた。交流座談会では、高齢者の普段の生活の様子や楽しみ、健康や生活で困っていることや気を遣っていることなどをお聞きした。学生はこの演習をとおしてわかったことや学んだことをレポートにまとめ、地域住民が抱える生活や健康の課題について考察した。

総括:

本演習は永平寺町ならびに永平寺町健康長寿クラブの皆さまのご理解、ご協力のもとに実施することができた。学生は、身体の衰えを自覚しながらも健康を維持するためにさまざまな生活の工夫をし、物事を前向きにとらえている高齢者の姿を目の当たりにし、高齢者イメージをポジティブな方向に変化させていた。一方、慢性的な身体の不調、内服、通院、免許書返納問題など多くの悩みを抱えながら生活していることも知る事ができた。

コミュニケーションにおいては、相手の話を受け止める、高齢者のペースに合わせて話す、大きな声ではっきり話す、楽しくなるような話をする、一緒に笑う、身振りや手振りなどのジェスチャーを取り入れる、目線を合わせる、相槌をうつ、スキンシップをとることが大切であると多くの学生が述べていた。このような学びは地域住民とじかに触れあったからこそこの学びであり、学習目標をおおむね達成できたと考える。

今後、本演習は、2022 年度の新カリキュラムに向けて在宅看護領域との連携して科目化する予定である(笠井恭子)。

3)在宅看護領域の FD の取り組み(2019 年度オープンキャンパス:2019 年 8 月 4 日実施)

担当教員:普照早苗、梅津千香子

在宅看護領域では、2019 年度オープンキャンパスにおいて高校生向けの模擬授業「在宅看護学の学習体験をしてみよう」を実施した。その際、FD としての要素も持たせ、教員 2 名と在學生(卒業研究グループ 4 年次学生 4 名)が模擬授業を一からつくりあげる活動に取り組んだ。教員の内、助教教員 1 名は新任者でありこれまでに大学教育経験がなかったことから、大学全体の広報催事に学生とともに取り組んだ今回が初の経験となり、教育実践のよい機会となっていたと思われる。

実施の具体的内容としては次のとおりである。当日参加者は高校生 60 人程度、30 分程度のミニレクチャーの後、実際に大学の授業にも取り入れている演習「つくってみよう！在宅で使える介護グッズあれこれ」(脱水予防！手づくり経口補水液、ペットボトルシャワー、チラシでゴミ箱)を行った。当日は、4 年次学生が高校生に対し、授業中の教員の役割をとって質問に応じたり手技のアドバイスをしたりと活躍した。なお、当日までに 3 ヶ月程度の短期準備期間の中、配布教材の作成、必要物品の調達・整理、リハーサルなどを行い、学生にとっては一から授業をつくりあげ高校生に教えるという教育経験ができ、やりがいや難しさを感じたとの評価を得た。また、教員にとっても学生に対して教育実践を指導するよい学びの機会となった(普照早苗)。

2.4.4.1 社会福祉学科

第 49 回全国社会福祉教育セミナー in 愛知

日時： 2019 年 11 月 30 日、12 月 1 日

場所： 日本福祉大学 美浜キャンパス

【1 日目】

●特別企画 「ソーシャルワーカー養成教育において教員に求められるスーパービジョンの力」

講師 岡田まり氏(立命館) 田村綾子氏(聖学院) 藤林慶子氏(東洋)

今回はより多くのソ教連加盟校教員が認定社士制度における SVr 登録者となることを目的とし、SV の基礎と特徴に関する講義と認定社士制度における SV に関して説明がなされ、SV 事例を用いたワークと講師によるデモンストレーションという流れで進められた。

教員の中には実務経験がない場合も SVr 経験 3 年(実習 SV は対象外)があれば機構に登録申請できるため、卒業生を集めた SV 実施を積み重ね登録 SVr となり、現任者の指導に貢献してほしいという点を強調していた。

●第 2 分科会 「障害のある学生への合理的配慮と教育機関における基盤整備」

コーディネーター 柏倉秀克氏(桜花学園)

報告者 船越高樹氏(京都) 富岡美紀子氏(明治学院) 岡崎利治氏(川崎医療福祉)

障害学生支援が法的義務となつてからの明治学院大学・学生サポートセンター体制と、入学時より支援担当教員を決めて障がいのある学生を支援していく川崎医療福祉大学での実践が紹介された。明治学院大学では留学支援のため学内の国際課との連携が多いということが特徴的であった。また、社士国試指定科目を卒業必修化した川崎医療福祉大学からは実習配属時のプロセスで実習指導者、学生、教員の三者で配慮事項を確認していく経過について報告された。

●第 4 分科会 「理論・歴史・政策にも強いソーシャルワーカーの養成」

コーディネーター 伊藤 文人氏(日本福祉大学)

報告者 竹端 寛氏(兵庫県立) 伊藤 新一郎氏(北星学園)

はじめに、伊藤氏から「歴史・理論・政策を分析し、それを実践にいかしていくことができる専門職が過小になっているという現状認識」、「もし、それらへ(への理解)にコミットしなければ、実践上どのような問題が発生するか?」といったことが分科会設定である説明がなされ、伊藤(新)氏からは、SWr(の実践)の在り方についての社会福祉理論・歴史・政策の有用性とは何かとの問い立てのもと学習の目的や内容・教授の方法などについて、竹端氏からは批判的思考をどう伝え教えるかということが話題提供された。その後、数名のグループに分かれグループワークの時間を持った。

●第 5 分科会 「ソーシャルワーク演習教授法を考える」

コーディネーター 保正友子氏(日本福祉)

報告者 田嶋英行氏(文京学院) 高良麻子氏(東京学芸) 庄司妃佐氏(和洋女子)

従来の相談援助演習では個別支援を主とした演習プログラムよりメゾ・マクロ領域での演習プログラムが少ないため、田嶋氏より「グローバル定義の演習(多様性の尊重)」、高良氏より実習後の相談援助演習で実施している「マクロソーシャルワーク演習」の展開について報告があった。そして、庄司氏より関東甲信越ブロックで7年ほど継続している「ソーシャルワーク演習教育研究会」の活動において、模擬授業等を行い教員同士で教授法を検討し合うことが教員の力量を高めることにつながっていると報告された。

●第6分科会 「大学院におけるソーシャルワーク専門職教育の展開～認定社会福祉士制度改革に対応して～」

コーディネーター・報告者 二木 立氏(日本福祉) 大島 巖氏(日本社会事業)
報告者 福島 喜代子氏(ルーテル学院) 高橋 信行氏(鹿児島国際)

認定社会福祉士登録者7,000人(2025年迄)達成に向けて、2019年9月に認定機構からタスクフォース報告書が出された。それに対するソ教連の提案(大学院ルートに係る認定基準及び手続き、科目の認証基準および認証手続きなど)についての説明が二木氏、大島氏からなされた。福島氏からはルーテル学院(2012年～)の、高橋氏からは鹿児島国際大学(2015年～)での認証研修の取り組みと提供状況が説明され、「通常ルート」での取得の困難さが報告される。ソ教連の提案については、12/15位には大学院設置校には配布、意見をとりまとめたうえ、12/17に認定機構と話しあい、1月中には、各大学に周知される予定。

【2日目】

●基調講演 「これからの人作り・地域づくりを担うソーシャルワーカー養成教育への期待」
谷村 誠氏(全国社会福祉法人経営者協議会副会長 社会福祉法人みかり会理事長)

2016年社会福祉法の改正における社会福祉法24条2項の追加によって「困っている人を見つけて手を差し伸べる」という社会福祉法人としての本業を実践していくことの意義と役割、地域生活支援や法人間の連携活動などについて話され、それらを担っていくソーシャルワーカーへの期待が述べられた。

●行政説明 「社会福祉士及び精神保健福祉士養成の新たなカリキュラムについて」
厚労省・社会援護局 富原博氏(福祉基盤課 福祉人材確保対策室室長補佐)
塩崎敬之氏(障害保健福祉部精神・障害保健課 心の健康支援室主査)

社士および精神の両課程ともに本年6月28日に公表された内容よりカリキュラムに関する詳細な内容はないとのことであった。

[パブリックコメント募集が遅れている理由]

- ・省令改正となるためパブコメ募集予定であるが、教育内容見直しを法令用語に直すことと関連法規の修正、文科省と厚労省間の調整に時間がかかっている。

- ・司会の中谷氏(桜美林)より、パブコメ募集が短期間で締め切られる可能性があるため、各大学でま
とめておくことが推奨された。

[実習施設範囲の見直し]

- ・(社・精) 現行の実習指定施設の範囲と実務経験施設の範囲を一致させた後に、指定施設の範囲を
拡充予定である。
- ・(社) 同一法人で2施設実習は妨げない。

[(精)実習演習担当教員要件の変更]

- ・教員要件の変更は行わない予定であるが、6/28 資料で示された例である「実習演習担当教員は
『精神保健福祉士として相談援助経験 5 年以上で、かつ、講習会を受講した者』講習会について
は 5 年ごとに受講すること』が望ましい」と自己研鑽を奨励する目的の文言は入る予定である。

●シンポジウム 「地域を基盤としたソーシャルワークを展開できる人材の必要性と養成の在り方」

コーディネーター 中谷 陽明氏(桜美林)

指定討論 大橋 謙策氏(テクノエイド協会)

シンポジスト 原田 正樹氏(日本福祉) 大塚 ゆかり氏(山梨県立)

畑 亮輔氏(北星学園)

まずは、畑氏からは北海道における社会福祉士養成・育成のためのプラットフォーム構築に向け
た取り組み、大塚氏からは大学の福祉・教育実践センターで 2010 年から毎月開催されている地域住
民と学生によるサロン(ピアカウンセリング学習会とミーティング)の実践、原田氏からはコミュニティに
強いソーシャルワーカーを養成する研修実施に至るプロセスと求められるソーシャルワーク機能につ
いて話題提供があった。その後、話題提供者への質疑応答も含め、大橋氏から地域共生社会政策
時代における「ソーシャルワーク機能」や研究法・教育法へのコメントが述べられた。

◆2020 年度 第 50 回全国社会福祉教育セミナー開催予定

日程：2020 年 11 月 14 日(土)～15 日(日)

会場：首都大学東京 南大沢キャンパス

※2020 年 4 月より東京都立大学に名称変更予定。

※2020 年初夏より参加申し込み開始予定。

2.4.5 授業改善についての課題と展望について

2.4.5.1 看護学科

看護教育では 3 年後期から 4 年前期までの 1 年間、病院や地域の施設にて臨地実習が課せられ
ており、臨地実習は看護教育の大きな比重を占める。学生は現場の看護師や保健師などの指導を
仰ぎながら、実習の場で現実の場面のみがつくり出す看護する喜びや難しさを実感する。そして、自
己の新たな発見と、自身ができることとできないことを深く自覚させられる。故に、これらに繋げられる
ような看護理論やその根拠を講義・演習で教授しなければならない。

また、近年の社会情勢を鑑みると、これからの看護職の資質として「社会に出るリーダーシップ、
看護提供に置いてのリーダーがとれる看護職」、「ケアの質と医療安全の管理ができる」、「看護実践
における倫理の重要性を理解し、看護を実践できる」等が重要視される。

今後も、これらを踏まえながら看護の特質を理解し、学習を深めていけるFDが必要であると考え
る。

2.4.5.2 看護学科

社会福祉学科のカリキュラムにおいては、社会福祉士ならびに精神保健福祉士の国家試験受験資格を取得するための指定科目が多く配置されている。その取得を目的に実習、実習指導、演習等の科目を履修する学生が多くいる。学生は机上の勉強だけでなく、様々な外部地域での実習を通して、今ある社会福祉の実情を身を持って体験・経験をすることにより、考え、悩み、揺れる心の中で自分の今後の専門職としての姿を創りだしていくことが可能となる。そのためには、日頃から学生との関わりを教員が持ち、その表情、行動、言動等を把握しながら学生一人ひとりの課題に気づき、それらと向き合い解決に向かっていくため一緒に目標を重ねていくことの大切さが必要に思われる。また、県を超えて本学に入学してきた学生への生活、一人ひとりの学生にマッチした環境を教育の中で整えていくことも課題となる。それは、学生が今何を必要とし、何を学ぶべきなのかを教員のサポートと一緒に具体的な経験の中で探し、学びを深めていく環境である。しかしながら講義、演習、実習の各科目の関連性について、それをどのように捉え、意味づけし、関連づけていくかということについて全教員間で十分な相互理解・コンセンサスを得るまでにはいたっていない部分があり、学生の学びを深めるための環境づくりという点でも、学科FD活動の大きな課題であると考えている。また、近年実習を履修しないで卒業を迎え、社会福祉領域以外への進路を選択する学生も少なからずいる。その学生についても卒業後の進路を見通しながら学士力に相当する基本的な知識・技術、技能を深め、社会福祉学科での学修に興味を持って取り組むことができる意欲を引き出すことが求められる。学生の中には、周囲の人間関係に過度に敏感になり感情が揺れ動いて、外見の表情からだけではとらえきれないようなストレスを抱える学生もいる。教育の中で学生自身が「聴く力」「考える力」「悩む力」「自己理解力と自己肯定力」「課題解決力」等を学びながら、学生生活をより充実させたものにするための工夫を検討していきたい。

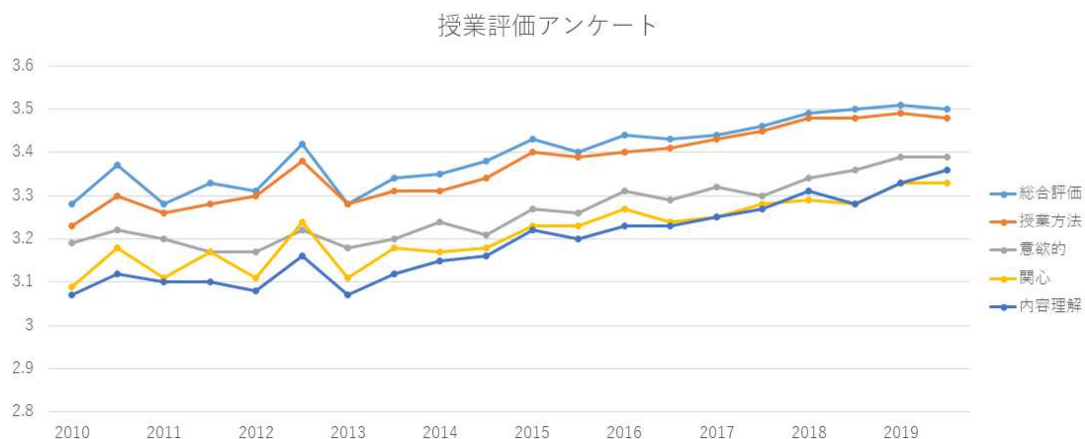
2.5 学術教養センター（加藤まどか）

2.5.1 授業評価アンケートの結果

学部生による授業評価全体集計（部局別）の結果をみると、学術教養センター（以下、学教センターと略）では、今年度もすべての項目において高い水準であった。過去10年間の変化を見ると、全項目で上昇傾向が続いている。学教センターの各教員の努力の成果が現れていると考えられる。

2019年度の前期と後期とを比較すると、「授業方法」「総合評価」の項目では前期より後期の数値が若干下がってはいるが、ほぼ等しい水準である。「内容理解」の項目では、後期の方が少し上昇している。「意欲的」の項目においては、2014年度以降、後期が前期より低いという傾向がみられたが、2019年度においては、前期と後期の数字はほぼ等しく、後期になると意欲が低下するという傾向はみられなかった。

一般教育	2010		2011		2012		2013		2014		2015		2016		2017		2018		2019	
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期
意欲的	3.19	3.22	3.2	3.17	3.17	3.22	3.18	3.2	3.24	3.21	3.27	3.26	3.31	3.29	3.32	3.3	3.34	3.36	3.39	3.39
授業方法	3.23	3.3	3.26	3.28	3.3	3.38	3.28	3.31	3.31	3.34	3.4	3.39	3.4	3.41	3.43	3.45	3.48	3.48	3.49	3.48
内容理解	3.07	3.12	3.1	3.1	3.08	3.16	3.07	3.12	3.15	3.16	3.22	3.2	3.23	3.23	3.25	3.27	3.31	3.28	3.33	3.36
関心	3.09	3.18	3.11	3.17	3.11	3.24	3.11	3.18	3.17	3.18	3.23	3.23	3.27	3.24	3.25	3.28	3.29	3.28	3.33	3.33
総合評価	3.28	3.37	3.28	3.33	3.31	3.42	3.28	3.34	3.35	3.38	3.43	3.4	3.44	3.43	3.44	3.46	3.49	3.5	3.51	3.5



2.5.2 授業公開の方針と実績

学教センターでは、授業は常時公開となっている。2019年度には2名の教員（石丸、加藤（裕））が、特に熱心に以下の科目についての授業参観を行った。

- ・中国語Ⅰ（亀田）
- ・地域社会とフィールドワークA（山川）
- ・ジェンダー論（加藤（ま））
- ・インドネシア語（加藤（裕））

- ・情報基礎演習(平塚・山川)
- ・教養特講 D(コトのデザインと発想)(谷内)
- ・神話学(松本)
- ・美学(北村)
- ・社会学(加藤(ま))
- ・環境論(大石)
- ・地理学(石丸)
- ・現代の科学(中村)

また個別の授業参観以外に、以下のようなオムニバス授業において、授業参観が活発に行なわれている。

まず、「**教養特講 I 研究の世界**」では、13名の教員(山川、森、木村、清水、熊谷、黒田、中村、亀田、徳野、島田、田中(武)、國崎、小松)がオムニバスで授業を行った。とりまとめ役の教員と講義担当者以外に、各回ともおおむね1~2名の参観があった。

開講2年目となるオムニバス講義「**比較文化論**」は、北村、亀田、加藤(裕)、森、山川、石丸、杉村、石原、中村、島田、長岡、サッカ、大石の計13名が担当した。毎回、登壇教員とは別に1~3名の参観教員があり、昨年同様、相互啓発の機会として有益な講義となった。昨年度の本報告では、授業に投入するエフォートの大きさとその効率性が問題点として指摘された。今年度は、各教員のエフォート削減と効率的な運営に向けた努力がなされた。授業に対する学生の評価も高く、FD要件の講義としては所定の役割を果たしたものと考えられる。

「**日本の文化と社会**」は、11名の教員によるオムニバス形式(杉村、松本、長岡、浜本、菊沢、田中、石原、北村、熊谷、デンマン、大石)で行われた。毎回2~3名の教員が授業を参観しており、お互いの専門内容を理解するよい機会になったと考えられる。また、講義方法も各教員によってさまざまであり、授業方法の工夫を学ぶ上でも有益であった。

以上にみられるように、オムニバス授業では、各教員が、専攻分野や世代が大きく異なる他の教員の授業ぶりを参観する機会が多く、これまでと同様に相互啓発の効果は大きかったものと思われる。

2.5.3 部局内FD研修

今年度は学術教養センター研究会という形での部局内FD研修は実施しなかったが、学教センターの教員が参加者としてかかわった、以下のようなFD研修が実施された。

F レックス合宿研修会

日時：2019年9月9日~10日

場所：福井県立大学・地域経済研究所・1F・企業交流室

学教センターからの参加者：山川、徳野、塚原、北村、石丸、加藤(ま)

内容：

◎1日目

日時：2019年9月9日 13:00~17:30

テーマ：「主体性の源とは何か」

講師：由佐美加子氏（CCCパートナー）

趣旨：

大学では、学生に主体性を持たせるために様々なプログラムを準備しているが、逆に学生の主体性をそぐような取り組みも見受けられる。講師の由佐美加子氏は、企業において人材開発を行う中で、主体性の源に気づき、それをもとにしたセミナーが爆発的に人気を博している。講師による主体性の源とは何かという説明の後、参加者との対話を通して、それをさらに探究するという、参加型のやり方で、研修会は実施された。

◎2日目

日時：2019年9月10日9:30～12:00

テーマ：「教学IRの現状と今後」

講師：徳野淳子（福井県立大学）

杉原一臣（福井工業大学）

安彦智史（仁愛大学）

田中洋一（仁愛女子短期大学）

司会：山川 修（福井県立大学）

趣旨：

福井県内の大学では、データをもとに学生の学習状況を把握する教学IRが、数年前から大学連携プロジェクトフレックスを中心に進められている。本セッションでは、各大学における教学IRの現状報告の後、今後の教学IRのあるべき姿を、パネルディスカッションの形式で議論した。

1日目が、台風15号通過のため首都圏の鉄道が午前8時まで運休したため、講師の由佐美加子氏が13時には到着できなかった。代わりに由佐氏のビジネスパートナーである河本伸也氏が京都から来福され、彼に前半をお願いし、後半、由佐氏に研修会をお願いした。1日目の参加者は27名で、福井県立大学10名、仁愛大学2名、仁愛女子短期大学6名、福井工業高等専門学校4名、山川の授業協力者（ゲストスピーカーを含む）5名であった。

1日目の研修は、共感、受容、怒り、自己肯定感等のテーマに触れながら、主体性の源について深いところまで掘り下げてとらえようとする内容であった。FD研修会としては異色の内容であったが、講師の魅力的な話に触発されて、参加者それぞれが、自分について、また学生や家族との関わり方について振り返る良い機会になったものと思われる。研修後の懇親会では、由佐氏・河本氏を囲んで、由佐氏の近著『ザ・メンタルモデル』（2019年、内外出版社）についての話題などで盛り上がり、遅くまで活発なやりとりがなされた。

2日目は教学IRの各組織の現状を報告して、今後の展望を探るセッションだったが、参加者は17名で、内訳は福井県立大学6名、仁愛大学2名、福井工業大学1名、仁愛女子短期大学6名、福井工業高等専門学校2名であった。

2日目のセッションについての司会者（山川）の感想は、以下の通りである。

「このセッションを終わって、教学IRの取り組みは、概して、私立大学の方が進んでいるように感じた。その理由は、文部科学省は私立大学助成金のチェックポイントの一つに教学IRを挙げているので、私立大学では少なくとも、教学IRを推進する部署か委員会をすでに設立している。一方、国立・公立の高等教育機関では、そういった部署の設立がこれからという

現状であった。」

2.5.4 授業改善についての課題と展望

2019 年度には、3 名の教員が、以下のような積極的な授業改善の取り組みを実施している。

- ・中国語（I・II）（亀田）

比較的多人数の学生に対して初級語学の指導を行うために、中国人留学生をSAとして雇い授業補佐をしてもらった。特に発音指導面ではきめ細かな指導を行うことができたとともに、自らの故郷や中国での日常について話してもらうことで実感のこもった中国文化紹介をしてもらうことができた。

- ・「歴史学特殊講義」（小浜）（松本）

ただ歴史を学ぶだけではなく、現代社会とのつながりを考察する講義を試みた。アイスランドの歴史と文化をテーマとし、日本との比較を通して、自分たちの住む社会の特徴がどのような経緯を経て作られているのかを考える機会とした。映画やドキュメンタリーなどの映像資料を多用したのに加え、ゲストスピーカーとしてアイスランドの現代政治を専門とする研究者を招き、最新の情報を伝えてもらった。また、海洋生物資源学科の授業のため、漁業や海洋生物などのトピックを取り上げたことも好評だった。

- ・「地理学」（石丸）

地形図の読み取りが苦手な学生が多いことが前年度に明らかになったので、一コマ多く時間を割き、ペーパークラフトの作成を行い、手元の立体を模写させて等高線の理解を促した。また、今期は人気科目と被ったため履修者数が約 30 名と少なかったため、大学近隣のフィールドワークを行い、地図の読み方と組み合わせることで実践的理解を図った。また、アクティブラーニングで学生の興味を引き出すために「世界が 100 人の村だったら」のロールプレイを取り入れ、違う人の立場を体験することで世界の格差を実感させた。

- ・「情報処理 F(映像作成）」（石丸）

ドローンでの映像撮影を実習として組みこみ、学生の好奇心を高めた。最終課題の映像はオープンハウス形式で、昼休みに公開して行い、聴衆にも採点をしてもらうオープン参加形式にしたことで、学生のモチベーションを喚起した。

以上で紹介した事例に限らず、学教センターでは、それぞれの教員により、日々、授業改善の取り組みがなされている。以前から指摘されてきたように、授業評価調査に表れる数値は学生の立場からの数値であり、学生の力が客観的に伸びているかどうかを測るものではない。しかし、その数値の変化からは、個々の教員による授業改善が着実に進められていることを、読みとることができるだろう。

以上

ファカルティ・ディベロップメント報告書 2019

発行年月 2020 年 3 月

編集・発行 福井県立大学 F D 部会